

尾崎喜八資料

第11・12合併号

特集 富士見時代の回顧

富士見日記 尾崎喜八遺稿より ————— 3

富士見で尾崎喜八とめぐり会った青年達(昭和20年代)

夏・先生の顔 朝比奈菊雄 ————— 17

尾崎喜八さんの事 岩波篤雄 ————— 20

わが心の師 尾崎喜八 岡田朝雄 ————— 24

農村の復興に誠意を込められた尾崎先生 名取正人 ————— 27

尾崎先生を偲ぶ 細川昭 ————— 31

穂屋野会のこと 川嶋利哉 ————— 33

*

尾崎喜八への旅 その五 伊藤海彦 ————— 36

尾崎さんと西欧—故・伊藤海彦に 三輪誠 ————— 44

*

資料と研究 嘉納忠明 ————— 41

*

尾崎喜八記念施設の開館と北鎌倉の旧居の焼失 石黒敦彦 ————— 46

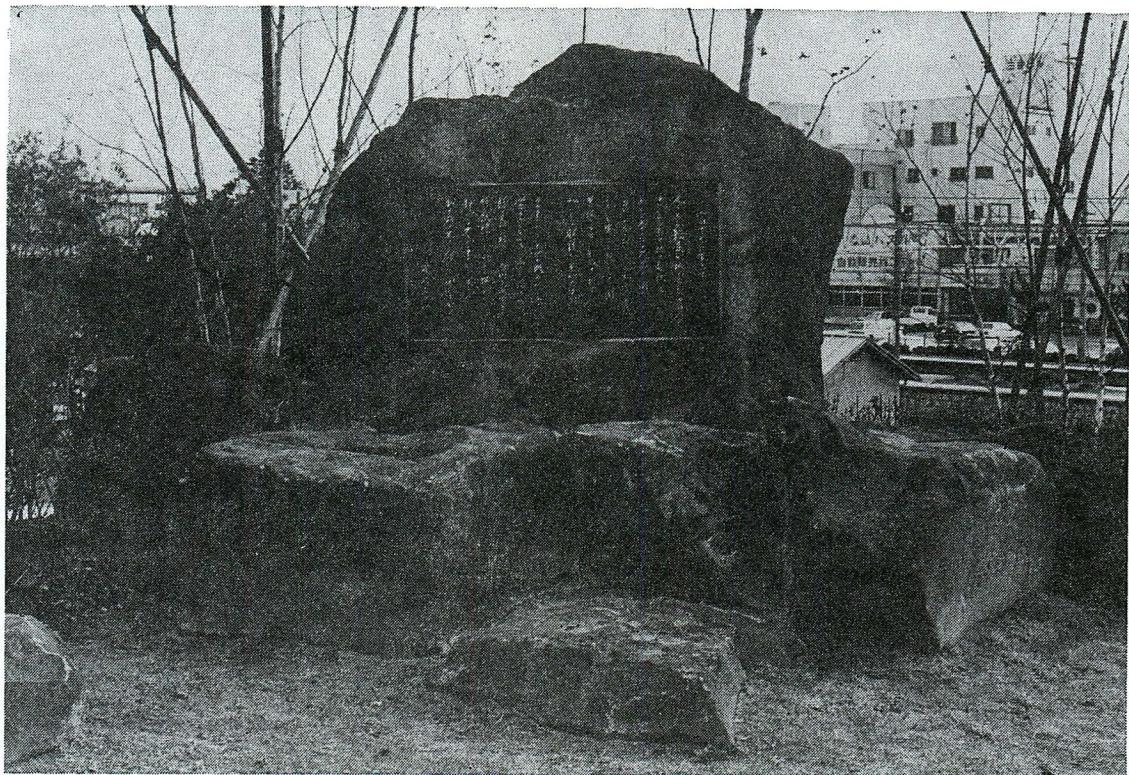
編集後記 ————— 47

*

表紙題字／草野心平

尾崎喜八研究会

1996年12月



長野県諏訪郡富士見町、コミュニティ・プラザの前庭にある詩碑「富士見に生きて」(自筆)。1980年8月に富士見尾崎会の呼びかけに応じた町民多数及び尾崎の友人達の協力のもと富士見高原中学校の敷地内「高原の森」に建立された。1994年、現在地に移転。

下はその碑文。碑文については41頁研究資料参照。

富士見に生きて

人を転変が私を二へ導いた。
古の岩石の地の起伏と
めぐらす夜の大いなる國。
自然がそ親しみ嚴かとして
こじり生活を規正する國。
恩徳うちに形成される
みごとす收穫を見ゆたす國。
そよ草十一の土地眺めが、今
四十六度やがる山々の頂きがら
緑の林に隠れた谷川。河原まで
時々試練にしてかりと堪え
辞せず大きな書物によつて
私は前に大きく便び開いていく。

尾崎吉八

富士見日記

尾崎喜八遺稿より

昭和21年8月15日～12月1日

原稿おこし 堀 隆雄

昭和二十一年

八月十五日

今日から気象観測を始め。七時、十三時、(六時)、二十一時。

——巻雲

七時。気温十六度四分、湿度八五%，風無く雲量二、縮んだ纖維状又は皺状の巻雲が入笠山(WSW)のうしろから放射状に出てゐるばかり。実に美しく、撮影して置きたい程だつた。空氣は透明で富士、鳳凰(地蔵岳)、甲斐駒、鋸、八ヶ岳連峰、釜無、入笠すべてほとんど鮮明に見えた。草上に露がどつさり、ハネナガササキリ(?)、エンマコホロギ、ツヅレサセコホロギ等が畑や草原で鳴いてゐる。燕一羽ピチーピチーと鳴きながら飛ぶのを見た。

十時四十五分頃の新宿行で石黒夫人と晶子さん帰京、その荷物を運びながら停車場まで行つたが、日射は強く暑かつた。巻雲は此時も相変らず見事、然し雲量に増減はない。いくらか北西の方へなびいてゐるかと思はれた。

——ウスバキトンボ

停車場付近にウスバキトンボ沢山。

十三時。気温二十六度七分、湿度四八%，風少し東南東の微風。朝と同様、纖維状と釣針形の美しい巻雲、量は二ぐらゐ。富士の山体右側に積雲状の層雲が湧き、八ヶ岳赤岳あたりの上空に片積雲三つぐらゐ漂つてゐるのを見る。

——スキ

南瓜の葉が暑熱と日射の強いため畠で萎えてある。エゾゼミ、アブラ蟬林に鳴き、

——アキアカネ山キテフ一羽を草上に見うけた。

十八時。実に稀に見る清明な美しい夏の夕暮。もう露が下りてゐる。

——美しい夕日の時

気温二十四度、湿度七〇%，風無く雲無く、ただ見る端麗な夕暮の山々谷々。太陽は入笠の右の山の背後に沈んだばかり。富士、鳳凰、駒、八ヶ岳、立科等すべて淡い紅紫色に燃え、殊に此處からは見えない落日に未だ正面から照らされてゐる八ヶ岳立科連峰は壯麗である。昼間の暑熱から開放された山林と草原は涼しい緑に映え、

——カントン

バツタ、コホロギの声にまじつて一、二匹のカンタンの清亮なトレモロ。林の方で時々アカゲラ、コゲラの「キヨツキヨツキヨツ」や「ジー」。それに樹下に繋がれてゐる山羊の声。池のあたりの藪でしきりに「キイキイ」といふモズの甲高い声。

——ヒヨドリ

ヒヨドリの声も昨日からきこえ始めた。裾野から釜無の谷へ帰るカラスが三羽、薄紫色の透明な空高く飛んで行つた。クロツグミはもう歌を歌はないが、尚此の森に棲んでゐて十羽ぐらゐは見うけられる。時々その軋り声

をきいたり姿を見たりする。それが今も地鳴きをきかせてゐる。

—キビタキ

朝と夕方近くには一羽のキビタキも現れる。此の六月五、六羽ゐてあんなに毎日歌つてゐたのが、今は羽換をすませて地味な羽色になり「ピーヨ ピーヨ クルツ クルツ」

と、静かな林の中を鳴きながらさまよつてゐる。どうも一羽しかゐないらしい。

—ワレモカウ

今日ワレモカウの紫褐色の花を見た。ユフスゲ。

二十一時。十九度、七七%。快晴、星と、

おそく十八日ぐらゐの月。

露しとゞ。コホロギにカンタン一、二匹の歌。頭上の琴、鶯、白鳥。

八月十六日

七時

気温十六度七分、湿度八七%、風は西の微風、雲一片もない快晴。入笠から富士までの鮮明な視程。但し昨朝より心持かすんでゐる裏の道路への往復に足はびつしよりになる。然し日当りではどんどん蒸発して行くと見えて乾いた所もある。

—ホホジロの歌

ホホジロが方々で歌つてゐる。林のへり、草原の灌木の枝頭、又は畑の土の上で餌をあさりながら。エンマコホロギ、ツバレスセ、バツタ等の歌相交ざる。

ヒガラの澄んだ「チン チン」、シジフカラの「ツーチヨ シヤガシャガ」。池の上ではオホルリボシヤンマが未だ姿を見せ、ノシメトンボも帶のある羽根をふるはせてゐる。月齢十八日ぐらゐの月が薄白く入笠の右手の尾根に沈まうとしてゐる。

—颶風予告

十三日正午の中央氣象台発表によると、「十一日中心示度九六〇ミリバール(七二〇ミリ)の大台風マリアナ群島東方海上に発生、日頃西日本へ上陸する可能性がある」とさうだ。被害の少なからんことを祈る。

—キビタキの訂正

今日も続いてゐるこんな快晴は、十一日から引続いた天気である。五日間晴天つゞきといふ事になる。正面の森の木立の中で「ピー ピー ピー クルクル・クル・」と鳴く鳥を今日双眼鏡でよく見たら羽汚灰緑色どうやらキビタキの雌らしく思はれた。雄の羽換をすませたのであるまい。午後三時の今も来て鳴いてゐる。林の中の余り明るくない所を好きな鳥だ。

—ツリフネサウ

正午に少し前森中の小湧泉池の少し下のところで、ツリフネサウの咲いてゐるのを発見、

これが去ると一羽のスデボソヤマキテフが来て入れ代つて蜜を吸つてゐた。此のスデボソは、やがて隣りのヒヨドリバナへ行つたが気に入らぬとみえて順々にクルマバナ、カウズリナ、サハヒヨドリと一つ一つ花を訪問したが、又戻つて来てアザミへとまり、ゆづくりと其花にとゞまつてゐた。入笠山を背景にそのあたりの白樺の白い幹に輝くやうな草原の緑、暑い日光。つめたい水の中には真紅の糸のやうな藻が一杯生へてゐた。

—トビ

折柄一羽の鳶が六、七百米の高空を悠々と滑翔し、時々翼を絞つて急降下し、又吹流れながら、此の快晴の正午の空中を自由の舞台のやうに舞つてゐた。その内裾野の一小地点に何を見つけたか、急に一撃みの羽毛のやうに翼をしばり身体をほそめると、つぶてのやうに一気に急角度の落下をして、向うの落葉松林の陰へかくれてしまつた。

十三時、気温二十七度六分、湿度五三%，風向S、風力一。

殆ど快晴。たゞ富士の左胴体、鳳凰の上、鋸のうしろ、八ヶ岳から立科までの連山の上等に、片積雲を認めるばかり。光三夫婦と隣家の名取さんも「今日は一番暑い」と言つて驚いてゐる。東京市内は勿論三十度を越えた

らうと思ふ。

又その傍らに玄参(ごまのは)科のミヅホ、ヅキの可憐な淡黄色の花を初めて見た。其処にはノアザミが花を開いてゐたが先づ一羽のクモガタヘウモンが来て長い間蜜を吸ひ、そ

八ヶ岳山麓に多いとあつて、又、隣家の渡辺氏の令息も採集したといふミヤマフキバツタ(フキを食ふ虫)といふのは未だ発見するに至らない。

十四時。気温二十八度六分、今日の最高。

千葉の三里塚へ行つてゐる寒子は、今日あたりリヤカーを曳いて小包か鉄道小荷物を出しに行つてゐる事だらう。二十日頃帰つて来るだらうと思ふ。暑いのに毎日忙しく苦労させてゐる。

十八時、二十四度五分、七〇%、無風快晴、

穏かな夕暮。昨夕よりもいくらか霞んで富士がぼんやり見える。甲府盆地方面は淡桃色の

濛氣。鳳凰山頂三層の笠雲。蟋蟀の声があつて來た。

富士見駅前の広場へ今夜が最終の盆踊を行く。若い男女約五十人。八時半頃から九時頃まで見て帰る。此頃金星、木星、スピカ何れも入笠の山かけに沈み、天頂には琴、鶯、白鳥の星座と天ノ川。八ヶ岳かすかに見え、釜無の谷に霧漠々。

此付近の盆の迎へ火と送り火の子供の唱へごと。

ボンサマボンサマコノアカリーデ オーイデ
オイデ 繰返す

ボンサマボンサマコノアカリーデ オカーヘ
リオカーヘリ 繰返す

八月十七日
七時。十八度五分、八八%。無風、雲量一、

片層雲、釜無山脈山頂付近に連鎖状の片層雲を見るのみ。視程は稍ばんやり。富士全く見えず。八ヶ岳は薄く輪郭だけを見る。草上に露。

——朝の花

ホ、ジロの歌、露に濡れて咲く花にアザミ、タチフウロ、ツルフヂバカマ、オミナヘシ、オトコヘン、ツユクサ、イヌゴマ、クルマバナ、ハクカ、ユフスゲ、コマツナギ、ゲンノシヨウコ、カウゾリナ、ヒメヂヨラン、イウガギク等。

十三時。二十六度八分、六三%。風NW、

風力一、雲量六、積雲。

此積雲はすべて鳳凰、八ヶ岳の山頂を被ふもの、一帯に銀青色のヘイズがあり、北西と東方に数個の立雲を見る。

午後立沢行。(光三、栄子と一緒) 小池光

重氏方へ。同氏は八ヶ岳高等農事研究所御射山分所の理事にて、立沢の篤農。同氏方で分所の小野、内藤両君と一緒に立沢の大山祇神社の祭礼を見に行く。立沢は立場川の谷側に展開した戸数三百余の美しく富裕な村である。神社では盛んな素人角力が行はれてゐた。

——イチビ
此辺ではイチビを麻と一緒に作つてある。

馬具の綱等に利用する由。但し小池氏は此植物の名を知つてゐなかつた。今は丁度花の咲く時で、丈の高い、大きな葉が緑の、花の黄色いイチビ(キリアサ)が方々の農家に見られた。一軒真竹と女竹とを栽植してゐる家が

あつた。富士見付近では竹は出来ぬが、此辺では多少出来ると見える。

小池氏方で御馳走になり、夜道を帰る。

二十一時、二十二度、七八%，無風、雲量

九、層積雲。

八月十八日

七時、二十度、八八%，無風、雲量七、余り濃くない積雲が南から。上空には薄い、力のない巻雲の帶と糸屑状破片、視程稍不良。山は釜無の中腹以下がぼんやり見える限り。露。黒鶲は未だある。

八時四十五分。

——エゾゼミの朝鳴き

はじめ時刻

八時四十七分エゾゼミ鳴き初める。昨日は

(詳細、野帳にあり)

八時四十五分。

十時頃から正午過ぎまで駅前郵便局へ行つた序でに木ノ間、若宮、原ノ茶屋を一巡散歩。

十三時。二十六度六分、六七%。殆ど風無。

雲量四、積雲(大小塊) 雲向SW、緩。空の色碧色。

午後五時半頃から驟雨性の雨となり、六時半頃止む。軽微な不連続線上の降雨ではないかと思ふ。

十八時、二十四度五分、七九%，風無し、

雲量(KN) 九、W、緩、微雨。

二十一時、二十二度五分、八三%，風無く、

大きいなる駆風、本邦南西部に接近の予報あ

るも、当地にては未だそれらしき影響も予兆も感ぜられず。

——颶風

米第二十航空隊第七氣象觀測所（東京）は十六日九州、四國及び本州全部に対し、二十四時間乃至三十六時間以内に強烈な颶風の襲来を予想されるとの颶風警報を発した。日本南部に颶風の襲来時の東京横浜での風速は三十ノットと予想される。第九偵察隊の軍偵察機は颶風速度及び針路を偵察、適時に第七氣象觀測所へ無線報告をする事になつてゐる。十七日午前三時颶風の位置は北緯三〇度六分、東經一三六度五分、と予想される。（十七日 東京朝日）

——氣象同好会

氣象同好会が生れ、十五日迄の会員申込者約四百五十名、「上は理学博士から下は国民学校二年生まで、学者、サラリーマン、詩人、女学生とあらゆる階層の人を網羅してゐる。変り種では詩人尾崎喜八氏が山形から駆けけるほか……」（十七日東京朝日）

同会会长は阿部正直伯爵。

「山形から云々」は何の間違ひやら。しかも自分は此会が之ほど具体的に計画されてゐたとは全く知らなかつたのである。

八月十九日

（午前九時半エゾゼミ鳴き出す。今日はいつもより約四十分おそい。）

七時。二十度八分、八八%、風向NNE、一、雲量九、駒、八、鋸山頂ぼんやり。草上

に露。

十時、Veil を裂いたやうな巻雲が数本南西から流れ出して天心を横断してゐる。別に仰角約二十五度のところを南から東へかけて薄い巻層雲（幕状）が横たはつてゐる。山々はすべて漠々とした層雲又は層積雲に包まれ、積雲も南→北へ飛んでゐる。地上風向南、速二程度、空は濁った碧色、気温二十四度四分、湿度70%。松籟と樹葉の摩擦音。どうやら颶風の影響範囲内に入った感じだ。巻層雲は次第に天心まで拡大する模様である。

正午。南々東の風。風力二乃至三位。雲量九、南と北に青空が少し透いて見える。薄い巻層雲。但し太陽は雲をすかして見え、地上に薄い影もうつる。駒ヶ岳、立科、北アルプス方面、それぞれ乳白色の立雲。八ヶ岳は権現以北層積雲を頂き、釜無入笠も山頂から稍下を一直線の雲底を持つSK（層積雲）に包まれてゐる。南と北との青空にはそれぞれ巻雲の縞模様が眺められる。エゾゼミ、アブラゼミ、ホーリョウ、カンタン等の声いつもと変りなし。太陽は暈（内暈）を現はしてゐる。

十一時頃栄子と二人で畠のトマトの支柱の補強をした。風に備へる為。ヤナギタンポポ、ギボウシとを花瓶のために取つて帰る。

十三時、気温二十五度五分、湿度六六%、風SSE、二→三、雲量十、但し薄いCS（巻層雲）とFK。太陽はCSを透して輝き、薄色の内暈。九六〇mbの颶風が今夜半島原半島を襲ふべしとの米軍予報あり。

——赤蛙

名取の和男、八平二少年が竹ビクを下げ林内の落クルミを拾いに行くので付いて行く。鬼グルミの樹は近い所に三本ある。丸い緑色の李形の実が樹下に落ちてゐるのを拾ふのが、馴れない眼には中々見つからぬ。馴れてゐる二少年はちきに発見する。これを取つて地下三十センチ位の深さへ二十日間位埋めて置くと果肉が腐る。さうしたら種子をとつてよく洗ひ乾燥するのださうだ。八平君が其間に赤蛙を見つけて捕へ、後肢を二本揃へて頭部を木の幹へ打ちつけて殺し、後肢の趾の所から前肢の腋の下まで皮を逆剥ぎにしてゐる。それを折つた小枝の先へ結びつけて、其の小枝を林の中の明るい地面へ挿込む。

地スガリ（バンニンキチとも言つてゐるさうだ）が此の赤肌の蛙を見つけて集まつて來たら、今度は此の肉を細かく切つて白い綿を結びつけ、同じ場所で地スガリに之を与へる。蜂はそれをつかんで巣に運ぶ。子供は此の白い綿を目標に後をつけて地スガリの穴を発見する。そして其穴の中に幼虫が出来た頃を見計らつて幼虫を採集し、食用にするのださうである。彼等は三四の赤蛙を発見して、銘々選んだ場所へ仕掛けた。クルミは五十あまり拾つた。

それから農場の傍の林の方へ散歩に行つた。西の谷を二つ越えた松林。其の二つ目の谷は美しい花の原で、一寸公園のやうな感じだつた。低くなつた方は少しばかり開墾が進み、ソバ等が作つてあつた。カハラヒハが二十羽

程。実になつた大根畠の大根の茎へとまつて盛んに種子を食つてゐた。

——ノスリ?

此の散歩の途中で一羽のノスリらしい鳥の飛廻り鳴いてゐるのを目撃した。色は黄味がかつて「ピー」といふ声で鳴いてゐた。

——クロツグミ

榮子はクロツグミの歌を農場付近で聴いたといふ。

十八時、二十三度五分、七九%。風殆んど無し。C(巻雲)又はCS(巻層雲)の薄きもの入笠を軸射点とし、權現をシユーレン点として全天を広々と流れて横断。但し、鳳凰、駒、八すべて見え、露は無い。

——ヨタカ

六時五十五分 ヨタカ頻りに鳴く。

二十一時、二十一度、八八%。風無し、薄き雲流れるものの如きも星はすべて見え、時々光輝明滅す。露。

十九時の颶風位置、北緯三一度、東経一二九度四〇分、中心示度九六五mb、時速十五km。

八月二十日

七時、気温二十度四分、湿度八二%，風南、風力一、雲量十、薄雲。(釣針状、ヴェイル状、波状)雲向北北西、中には之と直交するものもあり。空一帯に白濁を呈し、積雲少々浮ぶ。谷間より層雲湧上り、次第にK(積雲)

又はSK(層積雲)となる。富士を除いて他の山々は見える。露多量。

九時三十分エゾゼミ鳴出す。気温二十三度、

湿度七九%。薄雲の林中でヒメシロテフ一羽採集。此地では初めて見た。高原には多かつた。季節はやはり今頃だつたと思ふ。立科登山をした夏だ。

実子夕刻十二日ぶりで三里塚から帰つて来る。

八月二十一日

午前七時。層雲ので山々はおほむね雲に包まれ、釜無山も千五百米以上は雲の中だが視程はそれほど悪くない。北東五キロを隔てた中新田東方の開墾耕地の緑色が鮮明に見える位だ。今朝は鶴がこのあたりに沢山来て方々で鳴いてゐる。どういふ訳か分からぬが珍しいことだ。サンセウクヒが一羽「ヒリリヒリリン」と鳴いて飛ぶを見る。これも珍しい。ツバレセセコホロギとエンマコホロギの声がだいぶ賑やかになつて来た。然しそれ又開墾畠にも草原にも脱皮継続中の若いのがうんとゐる。これらのすべて成虫になつたら大した合唱だらう。

——エゾゼミの鳴き初めの時刻に於ける気温と湿度

八月二十日

九時十分。例によつてエゾゼミが一羽鳴き初め、つゞいて別の一羽が鳴き始めた。すると忽ちアブラゼミのもつと沢山の合唱が初まつて二十分間ばかり続いた。此のエゾゼミの鳴き出す朝の時刻は、どうも其の時の気温と関係があるらしい事に気がついた。八月十七日と十八日には其時の気温がとつてなくて残念だが時刻は八時四十五分、昨日は九時半で

気温二十三度、湿度七九。今日は気温二十三・五で湿度は同じく七九。事によると湿度も関係してゐるかも知れないと思ふ。八月十七・十八日の八時四十分頃も恐らく気温二十三度位あつた筈である。(温度、湿度、天気図表、参照)エゾゼミの朝の鳴き初めの時刻に於ける気温と湿度との観測を続けて何等かの関係があるものなのか突きとめて見ようと思ふ。

——キセキレイ

カラスは依然として集まつてゐるらしい。之を書いてみるとキセキレイの声がきこえた。吉祥寺と杉並へ來てゐた原稿依頼

○ 「少国民」十月創刊号。巻頭の詩 十行位。(日本経国社)

○ ○ 国民科学協会 隨筆 五、六枚
○ 「コドモエバナシ」講談社 執筆否問合せ

○ ○ 共同通信特信文化部 隨筆三枚
○ 「地方風物」更科源藏君編輯 隨筆か翻訳

○ 三笠書店 ヘッセ全集一冊分「母に帰る」加筆の件。

——クルミ

午後クルミの実を十四ヶ拾つて庭の片隅へ埋めた。二十日間そのまま。

隣家渡辺さんから「科学朝日」七月号を押借する。

同誌「七月の星座」によると金星・火星は大体獅子座に、木星は乙女座にある。いづれも東へ順行してゐる。土星は光度〇・四等、

双子座にあつて八月初めには日の出前五度の

高さに現れるといふ。(科学朝日)

東京上野科学博物館内に天氣相談所主任伊

坂達孝技官。毎週土曜午後質問指導にあたる。

(同前)

八度、一九日三日月と合。高さ約
二〇度。

木星 光度斬滅。月末一・三度となる。

月末金星とスピカを加へて低い夕

空を賑かにする。

——カラ類の巡回
エゾゼミ九時二十五分から鳴きはじめる。
今朝もカラスが集まつて附近で盛んに鳴いてゐる。此の原因らしいものは未だつきとめるに至らない。

——エゾゼミ

「科学朝日」八月号から

「八月一五日 夜明四時二六分 日出 四時

五九分

日入一八時三〇分 日暮一九

時八分

八月三一日 夜明四時四〇分 日出五時一

三分

日入一八時一分 日暮一八

時四二分

八月四日(太陽黃經 一五〇度)

節氣 処暑 二四日(太陽黃經 一五〇度)

暑さの終り

一日 下弦 月出 一二時五九分

月入 一二時二四分

一七日 朔 月出

月入 五時 五分

月初 一八時五〇分

月半 負三・八度

月末 負三・九度

金星光度

視直径も一八秒から二一秒へと増す。

九月八日 東方最大離隔、白昼の空でも見られるかも知れぬ。高度月初二四度月末二〇度、月末乙女座スピーカを過つて東一度の辺で九月に入る。月末三〇日金星と三日月合となる。一〇月天秤座へ進入する。

火星 光度一・八度。月末スピカの西北

朝七時の観測の帰りに、林の中でドウラマの所謂「カラ類の巡羅」に出会ふ。四十雀と柄長とを主として、それに少数の日雀をまじへた四十羽ぐらゐの群れだ。四十雀の地鳴(ツーツー ツーチヨ)と警戒音(ガシヤガシヤ)、柄長の低いトレモロ(トゥリリリリ)、日雀の「チイ チイ」が実に賑かである。

——カラ類と一緒にゐるコゲラ

それに交つて二羽のコゲラも樹幹をコツコツ叩いて調べてゐる。どうも此の数量の観察によると此のカラ類の仲間のゐる所にはいつも極つて一、二羽のコゲラを見るやうだが、事によつたら彼等も亦一緒になつて巡羅をしてゐるのではないかと思ふ。それとも彼等の領分へカラ類の進入して來たのを見て興奮して活動を始めるのかとも思ふ。

——サンセウクヒ

今朝は此の連中の集まつてゐる林の上の方でサンセウクヒが一羽一緒になつてゐるのを見たり其声を聽いたりした。之も仲間の一員になつてゐるのかと思ふが、此方は余り確からしさが無い。少くとも余り遠くへの巡回へは着いていかないだらうと思はれる。

—— サンセウクヒ
Gorden の下巻を見てゐると堆肥場にある前述の菌の菌苔とよく似たものゝ写真が出てゐる。Lauryer's wig Mashroom と云ふのだそうで、特長も大体当てはまるやうである上に食用に供するもある。それでもう一度念の為「日本菌類図説」を一枚一枚探つてゆくと淡紫褐色に著彩されたサ、クレヒトヨダケといふのがさうらしく、解説を読むと白色の物を著者は友人の外国人から教へられて食つたと書いてあつた。それで上述のやうに自分

も試食したのだが、格別毒でもないらしく、腹もどこもなんともない。たゞ余り充実してゐるし大きくないので、食べでが無いのが欠点と云へば云へる。有毒でないと極まれば熱湯でうでる（アンリ・ファーヴルは熱湯で処理すればどんな菌でも中毒はしないと云つてゐる）にも及ぶまい。第一それでない

と風味がわからない。

八月二十三日

林—荒地—畠—切明—湧水地と歩いて見かけた今の花。

—近隣の花

キンミヅヒキ（終期近）、ノコギリサウ（終り近し）、ヌスピトハギ（盛）、イウガギク、オトギリサウ（終り近く、光沢ある紫褐色の実美し）、ホタルブクロ（終り近し）、アキノゲシ、ミヤマママコナ、ダイコンサウ（終近し）、カハラナデシコ、ユフスゲ、ゲンノシヨウコ、ナンバンハコベ、ヒメトラノヲ（終り近し）、イヌゴマ（終近）、ツユクサ、ヒメヂヨラン（終近）、アレチノギク、キヨン（初期）、タチフウロ、ヤマハハコ、ヒヨドリバナ、サハヒヨドリ、ヤマラツキヨウ、ヒルガホ、ヘクソカラヅラ、ギボウシ、ツリガネニンジン、ワレモカウ、ススキ、コケオトギリ、ヤマジソ、ヒメシヨン、ヤナギタンポポ、ヤマアザミ、ムラサキツメクサ（終近）、カウヅリナ、クルマバナ（終近）、ハクカ、ツルフズバカマ、キキヤウ、ツリフネサウ、ミヅホホヅキ、フシグロセンノウ、アカバナ。以

上約四十五種。

○
—エゾゼミ

今日エゾゼミの鳴き初めは十時半（気温二十三度、湿度七三。太陽は暑く一時間以上前から照つてゐる）

○

庭の中を多数のウスバキトンボが飛び

こんな事は今日初めてだ——キリギリスが鳴いてゐる。（正午）雲は高く日光が暑い、風は然し涼しく吹いて松籟と葉ずれの音、（気温二十五度七）エゾゼミはもう鳴いてゐない（正午）。

—燕

午後一時半と四時頃、燕を見る。第一回二、三羽、第二回六羽。後の六羽は雨近き空を東に飛んで行つた。第一回のは鳴きながら空を舞つてゐた。

—カナカナ

午後三時五十分裏の切明けの横の赤松林で一羽のカナカナが鳴いたが直ぐに鳴きやんだ。此處へきてからはつきり聴いたのは之が初めてである。八月三日頃遠くで一羽なくのを聴いたかと思つたが、当時は耳のせいではないかと疑つた。武藏野では七月にはもう鳴いてゐる。こゝの七月を知らないので分からぬが、どうも少いらしい。

今朝七時の観測では気温十八・七度、湿度八八、草上に露があり、東の風一ぐらゐが吹いて雲量は七か八だつたが、天の北半分には

西へ緩かに動く多少波状を呈したKCが横はり、短い縮れた毛のやうなCと、アバタ模様のかなり広範囲のCKとが西方に輻射点をもつてひろがり、山はすべてS又はSKをまとめて、何となく不安な空模様だつた。折柄通りかゝつた名取さんに今日の天気を訊くと

「どうもえらいはつきりもしませんが夕立もくるでせう」と言つた。
午後一時になると釜無入笠の上に大きな積乱雲が立つてそれが忽ち仰角八十度位に伸び、東と北々西にも同じ位の立雲。東から火焰状のCが流れ出し、FKは西に動き、青空に日の量が現れて、不気味な雲景を呈した。

やがて一時半頃東北東に遠い雷五回を聴いて二時二十四分微雨があつたが、いくばくもなくやんだ。

しかし三時五十九分甲斐駒の上のあたりに

KNが漠々と拡がつて雷鳴の第一声をきかせず、続いて電光と雷鳴（光と音の間隔二十五秒）、実にもう一度雷鳴があつたが四時五分雨乞嶽が雨足にけぶり、それから五十分後釜無川右岸に見える赤ナギもぼんやりしたかと思ふと雨が降り初めて、そのまま遂に今に至るまで降り続いてゐる。（午後九時半）

名取さんの予報が適中し、自分の今朝の予感も当つたやうだ。それに今朝は釜無山脈の中腹に帶のやうに出来た山カツラ（層雲）が、雲底の高さは変らずに、上へ上へと盛り上つて山頂をかくし、やがて連続した積雲になる過程も初めて見た。
やはり不連続線の為す業のやうに思はれる。

此處でも亦東風は雨をもたらすのではないだらうか。

○

八月の太陽の位置 獅子座西半。

日の出入方位角

月初は二十三度 北

月末は十八度 北

南中高度七十二度半が六十八度に下る。

八月二十四日

——霧

今朝はこの富士見へ来て初めての霧を経験した。午前六時には五十メートル以上前方は見えない程の濃霧（階級六）で漠々とした白い霧粒の流れの濃淡の渦巻きを作つて東から西へと無限無終の感じで移動して行つた。一昨年のちやうど今頃、北海道行きの途中、東北本線の尻内から古間木のあたりで早朝やはりかういふ霧を見たことを思ひ出す。霧が薄くなると右手の太平洋の方から朝日が洩れ、高原のやうな感じのする寂しい風景の前景に柏だのハンノキだの林が続き、線路のわきの湿地にミヅハギがびつしより濡れて咲いてゐたりするが、旅の朝の心に嬉しいやうな悲しいやうな感銘を与へたものだつた。

午前七時になると霧は大分うすれて五百メートルまで見えるやうになり、ところゞゝ青空も現れ、やがて陽も射すやうになり、遂にはすつかり晴れ上つた。今朝早朝の冷めたく沈澱してゐた空気の上へ、甲府盆地の方から比較的の温暖な南東気流が流れて来て混合霧を発生

させたのではないか。太陽が八ヶ岳から顔を出す六時頃が一番濃厚な霧だつた。太陽も手伝つたのであらう。

——サンセウクヒ エゾゼミ

午前八時半サンセウクヒが鳴きながら飛ぶのを見た。エゾゼミ今朝も十時に鳴き出す。

気温二十二度、湿度七八、陽光。

——ウスバキトンボ

ウスバキトンボが沢山庭先を飛んでゐた。

八月二十五日

今日は午前五時から午後十時まで一時間毎の気温、湿度、天気、風向をとつてみた。午後から天気が悪変し、正午過ぎ突然風が南東から西へ変つてそれが約二時間ばかり続いたので気温がぐつと下つた為、曲線が多少不自然になつたが、大駄の様子が数量的に分つた気がする。

此の西の風が冬季には非常に卓越するといふから、此処での今年の冬の経験はちと恐ろしくもあれば面白さうである。

早朝森でカケス三、四羽を見、クロツグミを見た。カケスは普通の嗄れ声のほかに「ミーヤ、ミーヤ」といふやうな、小猫に似た声も出す。

例のヒタキも庭へ來た。サンセウクヒも鳴きながら飛んでゐるのを數度目撃した。トビの空を舞つてゐるもの見た。

松虫草がぽつぽつ咲き始めてゐる。

朝は相変らず日雀と頬白の歌だ。

今の草刈りで、一日一人前の刈量は六十貫、

馬一頭に六把積み、それが二回十二把ださうだ。一把五貫目に当る。刈場はめいめい定まつてゐる。（隣家名取久氏の話）

氣象同好会の伊坂達孝氏から来信、会の評議員になる事を頼まれ、第一回の総会に雲の話をしてくれと頼まれた。会則も送つて來た。

賛助会員年額百円。普通会員月額二円。賛助会員になる事とし、丁度蠟人形社からの小為替（稿料百円）をそれに宛てる事にした。

下諭訪發省営バス丸子行時間表

午前八時、午後二時四十分

（糞子調査）

九月五日

今朝はかなりの北西の風に明けた。諭訪湖や霧ヶ峰の方角から押し寄せて來て八ヶ嶽の裾野一体に吹きひろがり、地理学者の所謂富士見峠隘へ吹きこむ秋の季節風の先駆だ。午前七時の観測の時には未だ鳳凰山や八ヶ嶽連峰にねばりついてゐた鉛色の雲が、八時すぎ農場へ牛乳をとりに行く頃にはもうすっかり消えて、今では一点の雲もないきつぱりした秋晴の空ときらきらする太陽の光だ。そして此の山莊をかこむ森林の樹々の梢を絶えず吹きならず爽やかな風の響。赤松や落葉松の類の針葉樹では逞しい深みのある——ちやうど海岸の真砂の上を引く時の波のやうな——淙淵といふ響、白樺では乾いた、こまかいサラサラいふ音。幅びろで厚みがあつて、或る一定の間隔をおいて起伏ある此の松籜は聴けども飽きない。ちやうどこれを書いてゐる時、

眼の前の赤松と白樺へ夫婦のアカゲラが飛ん
で来て、しばらくこつこつと幹を叩いて打診
をしてゐたが、やがて雌を先に「キエツキ
エツ」と鳴きながら飛び去つた。もう夏の衣
替へを終つたらしく、背中と尾の黑白だんだ
らや、後頭部と臀や股のあたりの羽毛の朱赤
色がちらちらと木の間を洩れる日光をうけて
は殊に鮮明で見事だつた。雌には此の後頭部
の赤リボンが無い。彼等の仲間が此の森に少
くとも十羽近く棲んでゐることは確実だ。始
終見かけるし、又始終その鋭い叫び声や「ケ
ララララララ」といふ笑ひ声のやうなものを
聴く。そして相変らずの風の響と庭一面の暖
かい、むしろ暑いくらゐの日光。今、軒の高
さの空間を透明な金いろに光る五六匹のウス
バキトンボが往つたり来たりし縁先の薪の上
で真赤なノシメトンボが日向ばっこをし、一
羽のミドリヘウモンが暖かい地面へとまつて、
時々翼を畳んでは其の淡い草色と真珠色の模
様のある羽根の裏をみせてゐる。表は勿論ひ
かぴか光る褐色の豹紋だが四枚の羽根のうち
後の二枚はその金褐色がいくらか苦いろにく
すんでゐる。

○

九月一日

八ヶ嶽の西の裾野、それも釜無川や宮川の
谷に近いところでは、浅い輻射谷の緩傾斜を
利用して雑壇のやうな水田が営まれてゐる。
そして其の谷側のちよつとした平地には大抵
ハシノキの林が仕立てられ、樹下は腰を下し
たり身を横へたりするのに好適な芝やムラサ
キツメクサなどの短い草地になつてゐるとこ
ろが多い。此等のハンノキは毎年の夏の初め
裾野一帯に赤や樺色のレンゲツツジの咲く頃、
その柔かな若枝が若葉ごと伐られてそのまま
水田へ綠肥として壅きこまれるのである。だ
から木は丈けが低くてすんぐりして、幹の先
の瘤々なのが普通の形だ。これは違ふのかも
知れないが、オランダ時代のファン・ゴッホ
の素描に斯ういふ樹容をかいたのを幾つか見
かける。

今さういふハンノキ林の縁に坐つて、折柄
花かけ時のすがすがしい稻田を前に釜無の谷
を隔てゝ、夕映えに染まつた鳳凰山を見てゐ
ると、近くの落葉松のてっぺんと向うの電線
に棲まつたホホジロが、さつきから一羽で夕
方の歌合戦をやつてゐる。落葉松の方のが
What a splendid people is! と歌ふと三十
米ばかり離れた向うの電線のが Which is
your people? とやり返す。なかなか味のあ
る問答だ。そしていつか日も沈んで六里彼方
の鳳凰山の地蔵仏の岩塔が小さい一本の黒い
錐の先のやうになり、これがもう随分つゞい
てゐる。東のはう裾野の上の薄桃いろの空に
もなほ、水のやうに冷めたく澄んだ空氣の中、
ほんのりと青く地球の陰影が浮かび出た今で
この高原の夕暮の谷間に、彼等の民衆の応答
だか歌だかがひびいてゐる。

○

九月三日

私の気に入りの場所の一つであるいつもの
路傍の切株へ腰をかけて、午後三時頃の甘美
な日光と今日の爽かな風とを背に八ヶ嶽を見
てゐる。私の前にはおほかた葉を摘みとられ
た桑畠の斜面があり、その下にはすでに黄ば
んだ垂穂の稻田、そして向うの高みは一帯の
松林と点々とした耕地の眺めで、ソバの畠は
白く、キャベツの畠は銀青色に見える。そし
て此の快晴の日の空間にかすかに雲母の粉を
蒔いたやうに光る薄青い靄が掛かり、(それ
とも今日此頃裾野の各所で焼いてゐる野火の
煙かも知れない)それを透して見る八ヶ嶽・
立科火山群の蜿蜒五里に及ぶ連亘はすばらし
い。傾いた太陽に正面から照らされて赤味が
かつた金緑色に煙りながら、全地平線の殆んど
四分の一を占めて、南方の編笠嶽の北の外
れの立科山で終る澎湃たる山の波。その中で
も、いちばん印象的なのは、全山朱に染まつ
た主峰赤嶽と、肩を怒らせてそれに迫るやう
な阿弥陀嶽の岩峯と這松のヴィリジョンの色
だ。編笠と立科の円い頭は柔い淡褐色をして
ゐるが、それは彼等の山頂が磊々と風化した
岩塊に被はれてゐる事を示すものだらう。み
ずず爛る信濃の国の高原に風と日光との戯れ
の午後、どこか下のはうで草刈りの鎌のシャ
キシャキいふ音、分水界の勾配をあへぎなが
ら登つて来る東京行の列車の排氣の音。人間
の生活を思ひ出させる音響と云へば只それだけ
だが、なつかしい人生へ私をつなぐ是も一
縷の糸か歌だ。

九月六日

一日のうちでエグゼミの鳴き出す時刻につ

いて、もう書いてもいいときが来たやうな気

がするから結論めいたものを書留めて置かう。

此の山荘に住むやうになつて以来、——八

月の初めからだが——毎朝きまつて八時を過ぎた頃になるとエゾゼミが一齊に鳴き出す事

に気がついた。森の中の近くの樹で一羽が「ギリギリギリ」と鳴き出すると、それをきつ

かけに二羽三羽五羽十羽と、あたり近所の同

類が次々と鳴き初め、仕舞にそれがすつかり

揃つて、しばらくは耳を聾するばかりの大齊

唱になるのである。このギリギリの齊唱は半

時間とは続かず、それ以後は比較的まちまち

な断続的なものになるのだが、それにしても

朝の鳴き初めのは全く圧倒的とも云ふべきも

ので、おまけに殷々とひゞく唸りの現象をす

ら伴ふのである。それで私は一躰何時頃から

鳴き初めるものか知りたくて、最初のうちは

時間を書留めてゐたが、やがて之は時間より

も寧ろ気温に、或は湿度に密接な関係がある

のかも知れないといふ事に気がついて、八月

半ばからは時間のほかに其時刻の気温と湿度

とを取る事にした。それによると、鳴き初め

の時刻は日の経つにつれて、つまりは秋に向

ふにつれて、九時から正午といふやうに段々

に遅れるが、気温の点では摂氏二十二度あた

りが彼等の発音器にとつて最適の温度らしく思はれる。湿度も多少は利いてゐるらしいが、

此方は大して必要な条件にはなつてゐないや

うだ。勿論雨の日は鳴かないである。要す

るにそれ自身に体温といふものを持たない彼

等が、周囲の気温に暖められて、その発音器

の活動にややうどい位の体温を得ると、即ちそこで一定の筋肉を震わせて緊張した発音膜に振動を与へ、遂には身体全体まで一緒に振動を起こしてあのやうに盛んな夏の朝の鑽孔機の歌を生むのであらう。

此の土地にはミンミンゼミは居ないとみえて未だ一声も聽かない。ツクツクホフシはたつた二度、アブラゼミの数は此のエゾゼミと伯仲の間にある。六月に来た時には平地のハルゼミに代るエゾハルゼミが、蟬類中での最も優雅な瞑想的な歌、あの「ホーヒーホーヒー」ホーヒヒヒヒ……」を毎日聴かせてくれた。

(以上冒頭朱書一、二、三、四は「国民科学」伏島浩氏の懇請により九月六日同誌に寄稿す)

○

九月一日

今日イチキの実といふものを初めて見た。信州にはイチキの樹が多く、これが栽植され農家の防風用の生垣に仕立てられてゐる事

は今までにも登山や旅行の際に目撃して知つてゐたが、其の実を見たのは今日が初めてだ。

いつものとほり、今朝も子供連れのシジカラとエナガの一隊がやつて来て、表座敷から見える白樺や松の木のあいだへ散開したので、それを望遠鏡で見てゐるうちに、庭先に植わつてゐるイチキの樹の枝葉の一部がレンズの視野へ入つて來た。何んだかぼんやり赤い物が見えるのでフォーカスを合せると其の光沢のある濃緑色をしたこまかい線形の葉の

あひだに点々とまるい真赤なイチキの木実があつて、それが日光をうけてルビーの玉のやうに光つてゐる。暫くは小鳥をそつちに此の円筒の奥に拡大された植物の美觀に見とれてゐたが、つひに一枝を折つて手にとつて見た。實に美しい。

小指の先ほどの円い壺形の多肉質の実で、色はいくらく粉っぽい鮮かな赤、枝に接した底のはうには玉葱の薄皮のやうな色をした小さな薄い鱗片が付着し、平らに切られたやうな頭のところが盃形に凹んで、中から黒い種が覗いてゐる。摘まんで口にすると甘く、汁液には一種の粘りがあつて、微かにテレピンの香がする。植物学上では、此の肉質の部分は仮種皮といふ事になつてゐる。雌雄別株の植物ださうで、なるほど二本のうちの大きい方の樹には一つも実がついてゐない。

イチキは即ちアララギだが、隣家の名取のお嫁さんと娘のアサちゃんに訊ねたら此の辺では「ミネズボ」と呼んで、子供達が喜んで食べると二人とも言つた。何にしてもつやつやした濃い緑の針葉のあいだに、殆んど氣紛れのやうにところどころ、目もさめるばかりな、小さい紅玉を点じた此の実を私は讚嘆する。フーゴー・ヴォルフの歌に Auch kleine Dinge (小さい物でも)といふのがある。オリーヴの実でも眞珠でも、美しくて価値ある物はどんな小さくても人に愛され貰ばれるといふ歌だ。今それを思ひ出して、以前よく歌つた此歌の美をつくづく味ひ返すと共に、自分に縁遠いオリーヴの実に代へて、心の中で此

のイチキの赤くて甘い秋の実を喜び讃へる。

九月四日

Autumnal hue といふか Tints といふか、兎に角われわれの方でいふ「秋色」が、この九月初めの晴れやかな空の下、山野一帯の緑のなかにほんのりと染み出してる。

山桜はすでに真夏の頃からちらほら黄ばんだ葉を見せてゐたが、今では一本のうち一枝か二枝ぐらゐすつかり黄色くなつたり錆びた赤い色を呈したのがある。白樺の葉は

九月八日

今朝妻は起き抜けに一番の列車で東京へ出発した。一ヶ月ぐらゐの予定で、東京と三里塚とに残してあるわれわれの家財や書物をとりまとめて、こちらへ発送する為に行くのである。栄子と一緒に朝露を踏みながら停車場まで送つて行つて、親子夫婦しばしの別れを惜んだ。早朝の釜無山脈には灰いるの煙のやうな山かつらが懸かり、富士と立科は綿帽子をかぶつてゐた。

帰つてから二人だけの朝食の時、栄子が戦争前からの残り物だと言つてウーロン茶をいってくれた。それを一口啜つてみると、卒然として昔の或る情景がよみがへり、今から三十五、六年前銀座の「ウーロン茶」でたびたび森鷗外さんを見かけた事が思ひ出された。

当時陸軍省の医務局長であつたかと思ふ鷗外博士は、軍服に刀を吊り、室の片隅のティブルに軍帽をきちんと置き、端然と腰をかけて

茶を飲みながら、いつも必ず何か洋書を読んでいた。ドイツ語かフランス語の本を前に開いて、厚い滑かな無野の洋紙に鉛筆で何か書いてをられる事もあつた。多分翻訳をしてられたのであらう。其頃のいろいろな思い出をぼつりぼつりと栄子にしてやりながら、つい昨日の事のやうに思はれる時間と空間の、実はどんなに遠いものとなつたかを思つた。(裏席敷へ退いて机の上を清め、午前中の仕事に掛からうとする、T君からその新しい書物が小包で届き、東京のS君から親愛をこめた手紙が来た。其の手紙を読んでみると、栄子が食事の後片づけをしながら歌つてゐる「昔の仲間」がきこえて來た。)

本物の雨量計がちょうど手に入りさうもないで、今日は空缶に少しばかり細工を施して当座の間に合せのゲージを作つた。錆止めと熱線反射のために白ペンキを塗り、一米ばかりの竹の柱にとりつけて裏庭の芝生のまんなかへ立てた。溜つた降水の深さを測る棒を竹で作つた。これに物差しをあてがつて読みとるのである。かうして私の「小さい気象学」にも又一つ仕事がふえた訳だ。さつそく雨ではない一羽の真赤なアキアカネが来てとまつてゐる。

九月九日

今は秋蕎麦の盛りの時で、到るところの畠が其の花の為に真白だ。近くで見れば紅い茎と柔かい草色の葉の上にむらむらと盛り上つた白い泡のやうであり、遠くから眺めると純

白なマットかタオルを敷き並べたやうに見える。西南西三キロかなたの釜無山麓の斜面の耕地をくつきりと白くしてゐる其の花が、今は私の朝昼二回の視程観測の絶好の目標になつてゐる。

十月七日

昨日夕方からの雨が今は午後一時頃に止んで、次第に青空が現れ、少しは日光もさした。夕暮近く庭へ出ると頭上の青空に淡い金色に染まつた羊毛の屑のやうな高い雲が出てゐるので、そのまま森を出て見晴らしのいい所まで行つた。其時先づ何よりも私の眼を驚かせたのは青柳あたりの宮川の谷から濛々と噴上つて殆ど「天に冲する」とでも形容すべき真白な雲の——寧ろ霧の——大塊だつた。其の大塊は、然し實際は二千米近い入笠山やそれに続く山々の最高点以上に出るものではないらしく、入笠から釜無山の中腹へ濃密な縁の毳立つた帶——藤原博士の所謂山かつら——になつて、かなりの速度で南東へ、つまり釜無の谷の方へ動いてゐる。ところが一方同じ山脈の入笠よりも北方では、又別の低い層積雲と覚しい雲が、是は又堤を越える怒濤のやうに、山脈の背後から前のめりに、北東、つまり茅野・上諏訪方面へ滔々となだれ込み、その前駆はすでに山浦方面の空を鼠色に被つてゐる。八ヶ岳はどうかと見ると、それぞれの山頂が濃い灰色の層積雲で包まれて、其の雲は徐ろに北に向つて動いてゐる。此時の地上の風向は北西で前記の霧の雲と一致してゐ

るが、山脈を越える雲や八ヶ岳の雲の方向とは殆ど正反対である。つまり入笠山・釜無山あたりを軸として風が廻転してゐるので、山脈の背後では南寄りの風が吹き、前面では北寄りの風が吹いてゐるのである。惟ふに此時の一般的な下層の風は本来西か南西であつて、天竜川に沿つて北上して來たのが伊那盆地から釜無山脈に衝突して雲を作つてゐる一方、それとも諏訪湖から其の南東へ延びた宮川の谷では空気が吸ひ出されて反対気流が起り、それが青柳あたりから始まる富士見峠隘へ衝き上つて霧のやうな雲を作つたのではないかと、此の二つの可能性が考へられる。

山脈の背後即ち諏訪盆地に活動による低圧が出来てその為に飽和に近い水蒸気に凝結が起り、それが霧ヶ峰火山台地に衝突して、くるりと方向を転換した風に運ばれて來たものか、この事をもつとほつきりさせる為には、

同時刻か或は午後六時頃の風向・風速・気温、

湿度、それに雲向・雲形等を、飯田、甲府、霧ヶ峰あたりの測候所について調べてみる必要があるだらう。それでも若しも此時刻に入笠の山頂に立つてて、此雲量を眺めたならば、どんなに不思議な壯觀に接する事が出来たらう。

丁度此時、入笠の山の上には白金のやうに輝く宵の明星が出てゐた。頭上では谷の霧雲のちぎれが南へ南へと飛んでゐた。

午後七時半。表の庭で何か鳥らしい声がするからと言つて妻が呼びに來たので表座敷へ行つた。締め切つた障子の外は月夜で森の空

地の庭が明るい。娘夫婦と四人で息を凝らして聴耳を立てゝると、間近い所で——私は十米ぐらゐ離れた木の下のやうに思はれるが——たとへば石割斧で花崗岩を割つてゐるやうな、火花でも飛びさうな堅い、鋭い、金属的な叫びが二声三声響いた。鳥には違ひない。どうかして姿を見届けたいと思つてしまふ。らく待つてゐたが遂に姿を現さなかつた。声の音色、量等から考へて、どうもシギの仲間らしく思はれる。

別に、此の頃、やはり夜、森の中で「キヤーツ」といふ魂消えるやうな声を時々聴く。

それと之とは全く違ふが、この「キヤーツ」の方は事によつたらムサヽビではないかと思つてゐる。然しムサヽビが此森に棲んでゐるかどうかは確かにない。リスは勿論あるが、リスは「キヤー」とは鳴かないやうな気がする。

十月八日

「科学朝日」の十月号を見てゐたら理学博士辻二郎氏の「船室生活」といふ短い隨筆が眼についた。T君といふ音響学者が去年の四月に研究室と自宅と荷造りをして駅へ出してあつた荷物とをすべてそつくり戦災でやられてしまつて、今では六坪ほどの細長い船室のやうな実驗室兼寝室で「存外多彩な敗戦生活」をしてゐるといふ記事である。T君と言はれてゐる人は、戦争中ラヂオで空中から聽こえて来るプロペラの音で飛行機の機種を聽分け方を或作曲家と協同して放送してゐた有名な学者と同じ人ではないかと思ふが、それ

はどうでもいいとして、其の「戦時中には聴音機や音響分析機と首びきで水中聽音の研究に大童であつた」同氏が、今では「同じ機械を使って魚の鳴声を聴くのに余念がない」といふのである。何でも浜名湖邊で魚群の好き音を送つたり、魚群の発する音を聴いたりする実験をして居られるらしいのであるが、そのT氏が「お魚の鳴声はピチピチといふやうな声です」と言つたといふので筆者は「狐につまゝれたやうな」感じがしたといふのである。

之を読んで思ひ出したのは、私も多分以前に焼津の漁師の鰯漁業の実況を写して同時にトーキーにとつた映画を見て、其時船の甲板へ投げ出されて暴れまはつてゐる無数の鰯の群の中から「キイキイ」といふやうな魚の声を聴きとつたやうな気がして、それが面白くて其後映画に関する隨想の中に書いて發表した事がある。其時にはそれを読んだり私の口から聴いたりした家族の者や友人などからニヤニヤされ、私自身も、自分の耳のせいか、何かほかの音をさう聴いたのではないかと思つて半信半疑であったが、此の記事を読んで、曾ての私の経験も全くの錯覚ではなかつたらしいと、大いに意を強くしたわけである。若しも鰯が「キイキイ」と鳴き、或る別の種類の魚が「ピチピチ」と鳴くものだとすると、水中聽音機を使って遠方を通過する魚群の種類を判断し、その魚群と同じ声をこちらから如何にも愉快さうに賑かにおくつてやつて彼等をおびきよせ、さうして之を一網打尽に捕

獲するといふのも——隨分罪な話ではあるが——出来ない相談ではないやうに思はれる。

十月二十八日

——実子の上京

原島が目黒の自宅を他人に売つたので、預けてある亡き母の箪笥其他を荷造りして此処へ送る為に実子は再び上京しなければならなくなつた。約五日間位の予定なので、留守中の自分の炊事其他のこととなるべく手数の掛らないやうに万端の手順をこまごまと自分に教へて出発した。午前十時三十四分の新宿行上り列車は十五分ほど遅れて発車した。客車は込んでゐて座席が無いらしかつた。天気は快晴で、八ヶ岳の連峯は二千五百米以上を樹氷か樹霜に被はれ、あたかもヴェイルに包まれたやうだつた。

——八ヶ岳の霧氷

今朝七時の気温が四度だつたから六時には三度ぐらゐだつたらう。高さによる気温遞減率を仮に百米に付〇・五度とし、吾々の家の在る場所を海拔九百七十米とする、二千五百米の所は比較高度千五百三十米で約七・七度の低温の訳だから、午前六時頃には零下少くとも五度位であつたらう。日出は五時五十分。当時霧があつたかどうか知らないが、水点下の温度で過飽和になつてゐる水蒸気が昇華したか、或は過冷却してゐる雲の霧が水結したものであらう。霧氷は権現、赤岳、阿弥陀、横岳、硫黄岳、天狗岳、縞枯山等に及び、ここから見ると阿弥陀と横岳とが特に美

しかつた。望遠鏡で見ると殆んど一本一本の樹木がふつさりと銀色の頭巾をかぶつてゐるのがはつきりと見てとられた。これは自分にとつて初めてのみものである。多分「木花」と称せられる現象がこれであらう。駒ヶ岳、鳳凰、鋸等にも出来てゐたのかも知れないが、ちやうど逆光になるので見えなかつた。富士山はもう雲の縞を千筋の銀糸のやうに懸け流してゐる。

午前光三達の新居へ牛乳をとりに行く。栄子急性蕁脹症で二階に臥床、今日は熱は無いが胃の工合が悪いとの事。静養をすゝめて帰つた。

日が傾くにつれて気温がぐんぐん下がつたが、日没前三十分位の落日に照らし出された八ヶ岳の景観はすばらしかつた。もう金褐色になつた山腹までの唐松、その上の唐檜、大シラビソの濃い緑、それから上に未だ溶けない朝からの白い樹氷。連峯全体が堂々ときらびやかで、全く心を打つ光景だつた。

夜に入つていよいよ寒冷、北西の風は鎮まつたが午後九時の気温二・六度、快晴の空には続々と冬の星座が登場しつつあつた。

十月二十九日（火）

——初水
快晴、午後二時頃から南々西より巻雲射出。

今朝は六時零下〇・五度、七時一度、手水鉢の水が結氷し、今秋三回目の霜（初霜は今月二十日、第二回目は二十一日）が結び、それが最もひどい霜だつた。全国氣象概況によると本州中部を一〇三二一ミリバールの高気圧が被つてゐるといふ。今朝六時札幌の気温は六時で例年より一度高く、東京は四度で六度低いのださうである。札幌よりも六度五度、

東京の例年よりも十・五度低いわけである。八ヶ岳の樹氷は全く消えて、今日は薄霞の中で相変らずその唐松の橙黄色を見せてゐる。午後イデアルを提げて撮影に行く。刈取られた稻田の風景と、御射山農場の栗打ちの光景、それから栄子の家へ寄つて二階の窓から巻雲の出でる鋸・甲斐駒風景をうつした。栄子今日は昨日より元氣、入れ代りに光三鼻カゼで臥床。蟹と葱の油いためを菜に白米の夕飯を馳走になつて薄暮帰宅。

釜無の谷の上から続々と流れ出して來た今夜は天気悪化の前兆であらうと思はれる。夜は昨夜ほど冷えない。今夜実子は玉川石黒へ泊つてゐる筈だ。

十一月一日 日曜日

午前七時気温零下二度五分、曇、結氷と霜と霜柱とを見た。二十九日夜から三十日未明にかけて降つた初雪六センチは、庭や道路では正午頃にはすべて溶けた。もちろん山岳や丘陵ではほとんど昨日のまゝであり、野や森や畠地でも北や西向きの所には斑々と残つてゐる。

昼前栄子の家へ配給の酒一合、買つた豚肉少々、焼けて来たパンなどを届けに行く。道は雪どけと霜どけとでぬかるんでゐる。枯草にまじつた大待宵草の越年のロゼット、シロ

ツメクサ、ムラサキツメクサ、ハコベ等の緑の色がけなげだ。路傍ではそのムラサキツメクサに未だ一輪の最後の花を見、落日の中で羽根をふるはせてゐるアキアカネを一羽見た。山頂近くを灰色の層積雲にとざされ、山腹以下の雪を弱い日光に照らされてゐる八ヶ岳や鋸岳などを前景にツルウメモドキの金と朱との実が今日は殊に美しいものに思はれた。

—山雀

帰途此の山荘の森で、今日も四十雀の群にまじつた山雀を一羽見た。折柄通りかゝつた名取のおやぢさんに教へたら、此土地で山雀を見るのは初めてだと云つてゐた。自分も昨日初めて見たのだ。

午後上諏訪から伊藤海彦、中島邦一の二青年來訪、夕刻まで文学談をして帰つて行つた。それを停車場まで送つての帰り、提灯の光で降り出して來た雪に気づいた。午後九時の観測時にも雪降り気温零上一度五分、やがて小雨に變つた。気温が比較的高いせゐであらう。

実子は今日甘諸から餡を作つた。甘かつた。

水編集者・注記

遺品の中から敗戦一年後に安住の地として移り住んだ富士見での最初の日記を見付けた。それはこれから自分が暮らす高原の自然を一から知ろうとする観察日記であった。傷ついた心は遠い山河の向うに押しやり、ただひたすら自然の中に生きようとしているように思われた。しかし実子の思い切った激励の手紙、日記の書かなかつた日々を推測するとまだ傷心の途上であつたようだ。(尾崎榮子)

同年九月二十二日　喜八宛実子書簡

(尾崎夫妻は空襲で罹災後四軒の知人親類宅を転々とした。実子は各所に残してきた荷物の荷造り、発送の為上京中であつた)

昨夜九時すぎに三里塚から河田さんへ帰つて来ました。そしたらなつかしいあなたと女子からのお手紙が待つてとび上る程嬉しうございました。久しぶりにお二人の声を、なつかしい声を耳にした氣持です。

あなたは気が落つかずお困りの御様子、あなたしき事と御様子が手にとるようになり、一人にや／＼しました。どうか元気を出して下さい。そして張り切つて下さいましょ。私はこれからやつと落ちついた私共の生活が出来るとどんなに嬉しく楽しく思つてゐるかわかりません。私にとつては前のようにあなたと静かにすごす一日をどんなに楽しく空想しているかわかりません。私共がいつも豊かに楽しく暮せるかわかつていますでしょ。寒い冬の夜、コタツであなたが読んで下さる本、又はあなたが書かれたもの、歌を静かにきかせていてたく事、春になつたらと色々楽しい春を考え合う楽しさ、まだ／＼いい日を送るすべを知つてゐる私共は人に気兼ねをしないで自分達の家を持てるという事だけで私は本当に幸いな事と思うのです。それはあなたが武藏野の子だと言う事はよく／＼わかっています。最後は武藏野に帰つてまいりましょう。

私が家庭を持つたのは武藏野でしたからね。

あなたの好んでいらっしゃる国立あたりへ帰るよう努力いたしましょ。しかしこ今は今、与えられた一番いい道を歩きましょ。あんまりまわりの事に気をとられて苦労しないで下さい。明るい氣持になつて下さい。それから現実としてもあなたに明るい氣持で大いに働きたいいただきたいですわ。これから的生活を安定させ幸福なよい生活にする為にも。

(中略) 御手製の雨量計早速お役に立つた由御満足の御様子目に見えるようですね。

あなたはそうやって楽しく豊かに暮す事を作り出せる本当に幸せな方なのでしょ。あなたはこれからやつと落ちついた私共の生活が出来るとどんなに嬉しく楽しく思つてゐるかわかりません。私にとつては前のようにあなたと静かにすごす一日をどんなに楽しく空想してゆくのですから、それを忘れずにいて下さい。人に望まないで下さい。人に望めば失望しなければなりませんから。氣を長くして下さい。そして心をゆつたりさせて長生をしてあなたとのよい種子を沢山方々に蒔いて下さい。こんなお説教めいた事言つてごめん下さい。しかしあなたは此頃少し気が小さくなられたように思えるのです。実子の奴よくしゃべる。俺が黙つてゐると思ってと苦笑なさるかも知れませんね。まあこの位にしておしゃべりはやめて、次はこれからの仕事と用事の方の事を書きます。(後略)

富士見て喜八とめぐり会った青年達

昭和二十年代

夏・先生の顔

朝比奈菊雄

当時 高原療養所入院患者

病室に荷物をホウリ出ると、僕は廊下の外
れから出て、裏庭のスロープをのぼって行つ
た、見晴らしの良いところに出たかったので。
サントリウムの敷地が畑に移つて行くところは、柵も何も無い。東に向つて次第に盛り
上る大地の傾斜の果は、すなわち八ヶ岳だが、
しっかりと腰をすえた積乱雲に、上半身を突
込んで、いちいちの峯のありかは、判然とし
ない。虚空から八方に引いた裾野が、南はる
かな釜無川の谷に絶たれるところ、ホウオウ、
駒、鋸の峯々がそそり立ち、北方の八ヶ岳に
対してゐる。雲はかかるないが、梅雨明
けの七月初めの午すぎ、湿気の多い空氣を通
して、すこし稜線のするどさが減少して見え
る。目のクラむような強い日光を、よく育つ

さて、いつごろの話をしているのか、説明
しておいた方が良いと思う。昭和二十年に、
戦争が終り、二十一年四月に外地から復員、
十月から勤めに出て、八ヶ月経つた。戦地か
ら背負つて来た肺結核は、その時点で、時こ
そ來たれ、と、キバを剥き出したのである。

一年まえの六月、血を吐いた。診察した医
者は、僕が何とも云わないのに、
「なおる、絶対なおる、必ずなおるから安心
しなさい」と、声をハゲました。亨だなア
と思つていたら、案の定、グングン悪くなつ
た。体温は軽く四十度を超える、夜中に三度
もネマキを替える発汗、何も食べたくないな
り、骨と皮になつてしまつた。今や、僕の逃
り着くべき運命は、お医者さんならずとも、
確信を以て指さすことが出来ると思われた。
知らないのは、僕だけだった。ウンウン苦

た桑の葉がピカピカと反射し、畑の畔に植えられたヒマワリが高い茎の天べんに黄金色の円盤を行列させている。ひろい風景をわたつて吹きぬけて行く風はすこぶるさわやかだ。海拔千米の高地だけのことはある。

しみ乍ら、はやくなおつて、健康な人たちの仲間入りをすることばかり考えていた。やつと戦争も終つたのだ。ひそかに夢みていた平和な生活、家庭の団らん、山あるき、友人たちとの交歓、更にそれらのものを遥かに越えて、女性へのあこがれ……

世の人の妻と睡める夜半に覚めて

渡瓶^{ワタガラシ}引き寄せる我をあわれむ

その執念のせいいかどうか知らないが、ドン底におちた症状は、秋の訪れとともに好転しはじめた。そして一年後、七月はじめのいま、此の信州のサナトリアムに、ひとりで汽車に乗つて、到着する程、恢復したのである。

(中略)

此のサナトリアムでのさゝやかな期待の一つは、小谷部金助氏に会えるだらうということがたつた。昭和十年ごろ、北岳バットレス、前穂高の東面をはじめとして、勇敢きわまるラッシュ・アタックの連続で、僕たちを敬服させた、東京商大山岳部の名コンビ、小谷部・森川、ササやけば泣く子も黙るといふ、その名のひとが、今は胸を病んで入院しているということを聞いていた。

しかし、こののぞみは果されなかつた。小谷部氏は、数ヶ月まえ亡くなつていたのである。しかも、森川氏も同じ頃、此處で小谷部氏と運命を一つにしたといふ。古くから居る看護婦のひとりが次のような話をしてくれた。小谷部さんは、医者や看護婦のことをすこしもきかない。雨の日に裸になつてベラ

ンダで体操をしたり、芋の買出しにリュックを背負つて出掛けたりしたので、グングン悪くなつてしまつた。ある日、見舞いに来た森川さんは突然咯血、小谷部さんと枕を並べて、和な生活、家庭の団らん、山あるき、友人たちとの交歓、更にそれらのものを遥かに越えて、女性へのあこがれ……

一日経つて森川氏もそのあとを追つた……

その看護婦にも、「山好きな人だつた」ぐらいで、両氏が日本登山史上に残るほどの輝いた経歴を持つ「英雄」であつたことは、まったく此処では知られていない。僕は、人伝に聞いた、失恋が、小谷部氏の健康を破滅へと加速度をつけたということ、また冬の乗鞍岳の森林帯で、滑降して來た登山者が、上つて行く僕の目の前で勢よく転倒したが、ヒゲ面を真っ白にして起き上つたのを見ると森川氏で、「ヤー」と、歯並びの悪い口をあけてとだつた。昭和十年ごろ、北岳バットレス、前穂高の東面をはじめとして、勇敢きわまるラッシュ・アタックの連続で、僕たちを敬服させた、東京商大山岳部の名コンビ、小谷部・森川、ササやけば泣く子も黙るといふ、その名のひとが、今は胸を病んで入院しているということを聞いていた。

詩人、尾崎喜八先生が近くに住んで居られることもきいていたが、小谷部氏で失敗したあとなので、之も、本当かどうか、とためらわれた。しかし、事実だつた。一キロぐらいい離れた「分水荘」に、先生は、戦後を昭和二十一年八月から、ずっと過して居られる。散歩好きな患者たちの中で、其処を訪問した者は未だひとりも居ない。お目にかゝつたことはないが、「たてしなの歌」以来、先生の

たましいは、すでに僕にとって旧知のものだ、よし、出掛け見てよう。

七月末の夕方、見舞に來た妹とジロチョウと三人で分水荘を目指す。氷田を通つて西へ、傾斜に沿つて走つてゐる低い丘や浅い谷を水平に巻いて行く。落葉松の林はセミの鳴声がひびき、草原には晩間の草いきれが残つている。変化に富んだ徑をたのしみながら二十分ほど辿ると、コンモリした森が見えて來た。分水荘のあるところである。

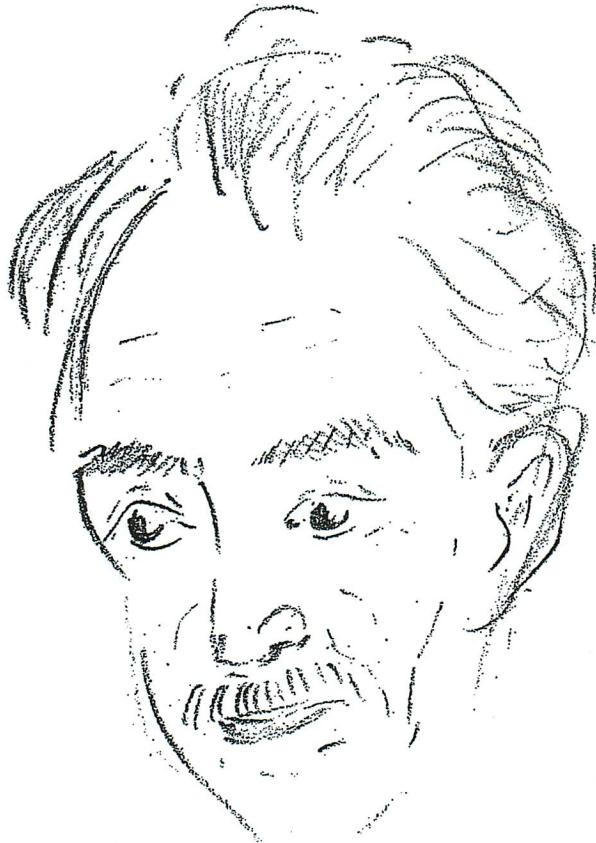
針葉樹と闊葉樹と混じつたこの森は、原始林ではなきそうだが、このあたりではいちばん見事なものだ。森の中央に、南面をやゝ開いて、大きな古い家が建つてゐる。ひとが一人、その家の前、花壇の真中に立つてゐる。小柄な、目つきのスルトイ老人である。大きなものをかかえている。やわらかいものでくるまれた赤ん坊である。トッサに、僕は、このひとこそ尾崎先生に違ひないと確信した。そしてその通りだつた。

突然現われた未知の訪問者たちを、先生は最上のものなしで酬いて下さつた。先生のそばにいて、僕たちはノビノビと氣楽にして居られたのである。

先生のお話を聞き乍ら、一同は森の中を逍遙し、茂みを抜けて、ゆるやかな高みをめざして登り始めた。先生は相不変、赤ん坊を抱いたままである。ミサちゃんといふ此のお孫さんは、生後四ヶ月にもならないのに、頗る大きく、堂々として、先生がミサちゃんを抱いているのにもかゝわらず、実はミサちゃん

が先生を抱いているのだという錯覚を、僕は禁ずることが出来なかつた。

何回もすすめるのを、ことわってばかり居ても悪いという配慮のだつたらう、ついに先生はしぶしぶミサちゃんを妹に渡した。しかし、その瞬間から、先生の目は俄かに不安げに、つよくミサちゃんに注がれ始めた。あたかも、のんびりした妹の腕から、ミサちゃんがともすればころがり落ちようとするのを、先生の視線が必死になつて支えているかのようであつた……



1950, 9, 22

今北喜八

K. A. 1950. 9. 22.

そのとき先生から伺つた、生物や風景に就いてのかずかずの内容に富んだお話よりも、

先生の顔

スケッチブックの中に、尾崎喜八先生のお顔を描いたのがある。

「一九五〇、九、二二 分水荘にて K. Asahina」と、サインしてある。一九五〇年の五月には、サナトリウムの火事で、退院の止むなきに至つてゐるので、このスケッチは、既に武田薬工東京工場に出勤している私が、連休などを利用して富士見に遊びに来て、分水荘に参上した時に出来たものであらう。同じスケッチブックに、先生のお孫さんのミサちゃんも描いてあり、日付は同年の九、二二になつてゐるのも、そのことを裏づけている。

さて、そのほかの細かい状況はもう忘れてしまつたが、サントリウムに療養している友人が数名同行していただろうし、先生の奥様も、忙しい仕事のヒマをぬすんで、香り高い紅茶をいれて下さつたり、漬物を刻んだり、談話に加わつたりして下さつたと思う。栄子さんやミサちゃんが、どうしておられたかは、すっかり記憶に無い。そんな具合に、記憶は大部分ボケてしまつてゐるのだが、ひとつだけ、ハッキリしているものがある。それは、先生は、出来たスケッチについて、御自分に似ているとはひとこともおっしゃらなかつたのである。

私にしても、ウヌボレは無いということは

(アルプ五号、昭和三十三年七月号より。
年代を明らかにするため小加筆を行なつた)

また折柄、八ヶ岳全山をあかあかと染め上げていた壮大な夕焼けよりも、気づかわしげに慈愛に満ちて、絶えずミサちゃんに向けられていた先生の瞳を、僕は何より先に想い出すのである。

ない。真に迫った先生像をモノして、讚嘆の声に取り巻かれたのは山々だが、そんなことが起る程、世の中は奇跡に富んでいるとは私でも思えない。せめて、

「うまいもんだナ」

とか

「ウーン……似てる……」

とか、そんな程度の愛想をいつていただきたいのだが、先生は、そのような讃辞めいたものは、ひとことも仰有らない。同席している人たちも、口数が少なくなつた。

先生は、私の方に向き直り、次のようなことを述べられた。

「私は、秋田雨雀さんに似ている、と、いわれたことが、何度かあります。この画は、秋田雨雀さんに似ています。してみると、どこか私に似ているのかもしません」

かくして、先生は、御自分を偽らず、また、客に対する寛容をも全うされたのである。

さて、短かいとはいえない時間が過ぎて、一九九四年（平成六年）の九月、つまり、つい先頃のことだが、私は昭和四十二年新潮社発行の『日本詩人全集』23の一八三頁をひらいていた。串田孫一さんの、「尾崎喜八・人と作品」という解説の中で、串田さんは次のように書いておられる。

今から十二、三年前に、尾崎さん自身からこう言わされたことを覚えている。「大勢の人たちが自分のことをいろいろ言って呉れて、

それは間違つてはいないが、大切なことを言い落している……」

私は、ハッとした。多くの批評家や作家が、文章で先生を表現するに当り、他人から先生を区別する、先生の本質にふれた重要なある言葉を述べ忘れたように、私は先生の御顔を描くとき、省略することの出来ない大切な線を描き落していたのではなかつたか……

（一九九四年平成六年十月三日）

筆者は前新潟薬科大学学長

ちひさい足あとを見出す土地に私は生きるはだしの雉子は富まないし旅のつぐみはあのやうに瘦せて赤貧だそれに、見よ、けさもまた山の伐採地からあの小娘がおりてくる

貧しさのをさない王女のやうに拾ひあつめた枯枝を背に霜をふんでよろめいて来る

私は彼等とそのひそかな生をわかつかなしげな彼等は、遠く、まじめで近づけばしんそこは快活で

ひろびろと撒きちらされた眞実を枝としてはかるくつかみ粒としてはこまかくついばむ

五寒の地にも遠い春のやうに咲きながら孤独に、純に、みづからをちりばめる彼等の上を

あゝ、冬の貧しさのためにいよいよ広く神々しい

朝々の空が大河のやうに青く流れる

この朝のひかりという尾崎さんの作品は、富士見高原の渡辺氏の別荘で生活をされた頃のもので、昭和二十三年三月二十日発行の「つめくさ三号」のために頂いた作品である。当時まだ医学生であつた私は、「つめくさ」のために何回か作品をねだりにうかがつたものである。尾崎さんは富士見で相当質素な生

朝のひかり

朝々の白い霜のうへに
人に知られぬ貧しい者らの
夜あけの嘗みを物語るやうな

活をされていようとおみうけしながら、こちらもどうすることもできないまゝ、あつかましく毎回原稿をたゞで頂いてきたのだった。

日本の社会で詩で生活することが、いかに困難であるかをおぼろげながら承知していたのに、若げのいたりというべきか、今もって悔まれ、思いだせばひや汗をかく次第である。朝のひかりのなかには初冬の富士見高原の風物が美しく、悲しく歌いこまれているように思える。自然を歌えば、実にすぐれた詩人であつた尾崎さんは、富士見での孤独でこな自由な生活のなかで、少数ながら親しい諏訪地方の友人、知人をもつておられ、うかがうとそれらの人達のことを、富士見の自然のこととあわせて、楽しげによく話して下さったことを今でも思いだす。国鉄の富士見駅と渡辺別邸の間を、その時々あちこち迂回しながら御一緒に何回か散策したが、小柄な尾崎さんは足ばやで、それでいて実によく小鳥や草花や木を観察されていて、たびたび驚かされたものである。尾根づたいに歩きつつ、私に小鳥や草花の生態など話して下さりながら、尾崎さんの内部では、一篇の詩が熟していたのかも知れない。またあるよく晴れた初冬の頃話をうかがいながら歩いていると、ふと立ちどまられて、あつ今富士山の辺は厳しい西風が吹いていますねといわれ、ごらんなさい、吹雪のようなものが、さかんに東にとんでいいるといわれたことばを今もつてよく覚えてい

る。

苦しい体験になつた戦争が終わつて、それ程時間が経過していなかつた終戦後の富士見での生活当時の尾崎さん的心情には、富士見高原のあの厳しい、はだを裂くような寒さと響きあうものがあつたのかも知れない。夜半、空間がしんしんと音をたてながら、ものみなをこおらせるように、そして朝方みれば一面に霜がおりたつているというようなこともいわれた記憶がある。

私が尾崎さんのこと書くについては、「つめくさ」についてふれないのでいかない。一時期尾崎さんに私がふれることができたのは主に「つめくさ」を通してであった。「つめくさ」は、今は茅野市になつている当時の玉川村の若者を中心、宮沢賢治の世界に関心のある諏訪地方の人達がつくるていたことを今でも思いだす。私は宮沢賢治の世界にひきこんだのは岡安君という医学博士の頃の栎木出身の友人であったが、そのおかげで当時生家のあつた玉川村で、今日郷土史に造詣の深い浅川君を始め何人かの村の若者と地人塾をつくり発足後しばらく賢治研究を中心にはなどかさねていたが、昭和二十二年三月三十日付でつめくさの創刊号をだし、以後三十九年九月二十日付で発行の四十号迄つづいた詩を中心とした同人の雑誌が「つめくさ」である。雑誌の他に詩集「つめくさ」である。雑誌の他に詩集「つめくさ」を三十八年十二月一日付で発行している。「つめくさ」の長野県下における文学活動としての位置づけは、四十四年十二月二十五日付で信濃毎日新聞社が発行したしなの文学新地図や、かおすの会が一九六三年にだした信州詩壇回

顧に書かれている。

この一地方の若者の詩誌「つめくさ」に何度も寄稿して頂き、その作品をお願いし、富士見に頂きにいつてくるのが私の一つの仕事であったわけである。いましらべてみると、先程ふれたようにお知りあいになつて初めて三号に寄稿して頂いてから、二十七年八月十日発行の十九号迄の間に、都合十一回十一篇の詩を掲載させて頂いた。このなかには尾崎さんが我が國で初めて訳された、ライナ・マリア・リルケの詩「月夜」と、エドヴァルト・メーリケの詩「ランプ」が含まれており、他の九篇はすべてモチーフが富士見高原のものである。

自然をうたつてもつともすぐれた詩人であつた尾崎さんの作品には、季節感がずい所にちりばめられていて、微妙な季節のかわりめのものを適当にわけると、富士見高原の冬の季節の作品が三篇、以下夏三篇、秋一篇、春のもの二篇となつていて。それらいずれの作品にも富士見高原をとりまく山々や、風や光、あるいは小鳥、草花が歌いこまれ、村人や古い民家がしばしば登場していくのである。

リルケの訳詩を一篇頂いたことは前に述べた通りだが、外国の詩人ではリルケの他に、同じ独乙の詩人ハンス・カラッサの作品を読むように一番すゝめられたおぼえがある。尾崎さんご自身、リルケの特に独乙の地方の風物をうたつた初期の作品がおすきのようであった。私もその頃リルケ詩集を買って、むさぼり読んだが、ドウイーノの悲歌や、マルテ

の手記に至つて、ここまでくれば私などには到底ふみこめない世界だと、挫折感を味わつた記憶がある。

医師カロッサについては私が医学学生であつたこともあつて特にすぐめられたようである。

医師という仕事は大変きびしいが、カロッサの小説ギオンなどよめばよくわかる。あなたもお医者になるんだねえ。是非カロッサをよみなさいよと何度もいわれ、当時養徳社からでいた、カロッサ全集を買いこんで詩集やあの独特の小説を何度もよんで感動させられたものだつた。カロッサという人は独乙の地方の街に住んでいて、結核医としても立派な仕事をしていた人なのに、決して首都ベルリンに出ていこうとしなかつたようだともいわれた。私は若い時代多くの友人知人の影響を受け、またそれらの人達のすゝめてくれた東西のすぐれた詩人や作家のものをいくつか読み心動かされたが、尾崎さんもその中の重要な一人であったといまもその面でも感謝している。

リルケの作品は植物質であり、カロッサのそれは、鉱物質ですね。

カロッサの作品が鉱物質で、緻密で構築的のは医師という自然科学の一分野の仕事にたずさわっていることが影響しているんでしようね、といわれたことも、今でも鮮烈におぼえている。

日本の詩人では矢張り高村光太郎の人や作品のことが一番話にでたように覚えている。高村光太郎がすぐれた詩人であると同時に、

よりすぐれた彫刻家であるといった話からロダンの彫刻のことを話して下さつたりした。

尾崎さんは動植物や鉱物についての自然科地人塾は雑誌の発行の他に、二十年代の荒廃のなかで、各種の文化活動もした。それらのなかで尾崎さんをわざわしたこともあつたので若干ふれておきたい。

ひとつは二十五年八月今はもうとうになくなつて、諏訪市関ホールで講演会を開催した。「第四次元の芸術」と題された谷川徹三氏と、「ベートーベンの人間像」と題された尾崎さんのお二人を講師としてお願ひし、当时としては珍しく数百名に近い聴衆で大変盛會であった。谷川氏のおはなしは、もちろん宮沢賢治の芸術の世界のことであった。谷川氏は当時法政大学の文学部長をされており、賢治友の会の顧問もされておつた関係でお願いしたのであった。

賢治友の会といふのは、大部前に故人になられた佐藤寛氏が主催されていたもので、例会や機関紙四次元の発刊などを中心に運営され、私もそれらに関係していたが、二十四年の九月、東京で講演会をもつたが、その時の講師が「賢治の文学について」と題された仏文學者の中島健蔵氏と、四次元世界の芸術についてと題された谷川氏とであつて、その時の谷川氏の講演に感銘をうけた関係もあつて、はるばる諏訪の地までお願いした。なおその

年は同じ九月に、歴程社詩朗讀研究会の主催で、有楽町読売ホールで大変ユニークな宮沢賢治祭が行われたが、その時も草野心平氏ら

と共に谷川氏は登場している。

関ホールでの尾崎さんの講演については、「つめくさ」十二号に高木栄一氏が感想文を書いてお話し頂いたように思う。お宅にうかがつたときでも、音楽家のことではベートーベンのおはなしが比較的多かつたように記憶している。画家ではミレーの絵のことも話題になつた。尾崎さんの詩は自然を的確にとらえて映像的な表現となつてゐるが、根底には音楽的リズム的なものが流れていると思われる。ひびきがあるのである。おそらく富士見の青く高い空を渡る風に音楽的なものを感じとられていたのではなかろうか。

もう一度は二十六年八月、諏訪市城南小学校の講堂で開催した講演会の折に尾崎さんをお願いした。この時は、かつて法政大学でフランス文学の講師をされていた原田勇さんが

会長をしておられた、ロマンローラン友の会諏訪支部と共催で挙行した。同会の方は当時日本ロマンローラン友の会の代表をつとめておられた、独仏文學者でありかつ、詩人であつた片山敏彦氏を招き、つめくさの方は、後でふれるが詩人の菊岡久利氏に仲介を願つて詩人の草野心平氏にきて頂き、その時尾崎さんも再び頼みこみ、ご出馬願つて都合三人の顔ぶれであった。この時はまず草野心平氏が

登壇、高村光太郎についてと題して、着ながしで、獨得のゆつくりした口調で同氏にあつた時の印象や高村氏の内部における、東洋的なものと西歐的なものとの対立や融合について話された。次は尾崎さんの順序で、特別のテーマなしで、長い間の文学上の知己であるお二人と諏訪の地でお会いする奇遇を語り、一大歓迎の挨拶をされたあと、ご自身ほん訳をされている最中のジャムの詩の朗読をなさり、六百名を越す聴衆の会場全体が詩的ふん意気があふれたのであった。尾崎さんの詩自身がそうであるように、朗読もまた実にリズム的であることを覚えている。最後の片山氏は、ロマンローランとヘルマンヘッセのテー^マで西欧の文学芸術の根底とそれを支える形而上学的な世界に言及され、さらには東洋的精神と対比されながら、ヨーロッパの幾人かのすぐれた芸術人たちの東洋文化への関心など熱意をこめて語られた。このいわば地方における詩の祭典は終始、水をうたつたような静けさのなかに、原田氏や藤森久弥氏の司会進行ですめられたのであった。この日の尾崎さんの表情には複雑さのなかに明るさがあったのを覚えている。

この雑文が終わりに近づくに従つて、渡辺邸にはじめて尾崎さんをおたずねした動機のようなものにふれておく必要を感じる。終戦直前、偶然のことから東京で私は詩人の菊岡久利氏にめぐりあつた。同氏は青森県の出身で、若い頃はアーチー^{アーチー}的色彩のいい詩を書いていたが、その後、『貧時交』や『悲

しい頑具』の詩集で日本の詩壇の第一線にでたことを同氏の仲間から聞いた。戦後は日本未来派によって健筆をふるわれた。終戦直後からしばらくの間、同氏の事務所のような所で話された。次は尾崎さんの順序で、特別のテーマなしで、長い間の文学上の知己であるお二人と諏訪の地でお会いする奇遇を語り、一大歓迎の挨拶をされたあと、ご自身ほん訳をされている最中のジャムの詩の朗読をなさり、六百名を越す聴衆の会場全体が詩的ふん意気があふれたのであった。尾崎さんの詩自身がそうであるように、朗読もまた実にリズム的であることを覚えている。最後の片山氏は、ロマンローランとヘルマンヘッセのテーマで西欧の文学芸術の根底とそれを支える形而上学的な世界に言及され、さらには東洋的精神と対比されながら、ヨーロッパの幾人かのすぐれた芸術人たちの東洋文化への関心など熱意をこめて語られた。このいわば地方における詩の祭典は終始、水をうたつたような静けさのなかに、原田氏や藤森久弥氏の司会進行ですめられたのであった。この日の尾崎さんの表情には複雑さのなかに明るさがあつたのを覚えている。

おたずねすると大抵、もの静かでお若い感じの奥様とお二人で静寂なふん意氣であった。いつも手作りの茶菓子でお茶を入れて下さり、尾崎さんのお話しのあい間に、時たま静かな笑いをうかべて口をはさまれた。会話の内容は、今となっては残念ながら殆ど覚えていない。買物はときには上諏訪まで出かけ、招かれた知人のお宅におよりしたりしてくるんですねなど話された。寒い時はストーブを赤々と引き、その上でわいたお湯でコーヒーを入れて下さり、それをすりながら、若げのあつかましさで、時のたつのも忘れて文学論争などをしたりした。何回位渡辺邸にうかがつたか覚えないが、二度お嬢さんがこられておる時にでくわし、そのうち一度は御主人の石黒氏と御一緒であった。その時はいつもは静か

んの所にお邪魔し半日近く過したことがあつたが、帰路につくと開拓村の入口までわざわざ送つてこられ、私は元来足がおそい方だつたが、今日は岩波歩調で送つてきましたよといつて笑われ恐縮したこともあるたし、その折初対面の川上君に別れぎわ、煙草に乏しいねなさいといつてすぐ紹介状のようなものを信州の諏訪だといつたら、それなら僕の古い友人の尾崎が富士見に居るから、是非たずねなさいといつてすぐ紹介状のようなものを書いて下さり、それを手にしてまもなく、渡辺邸に尾崎さんをおたずねしたのだつた。

おたずねすると大抵、もの静かでお若い感じの奥様とお二人で静寂なふん意氣であった。いつも手作りの茶菓子でお茶を入れて下さり、尾崎さんのお話しのあい間に、時たま静かな笑いをうかべて口をはさまれた。会話の内容は、今となっては残念ながら殆ど覚えていない。買物はときには上諏訪まで出かけ、招かれた知人のお宅におよりしたりしてくるんですねなど話された。寒い時はストーブを赤々と引き、その上でわいたお湯でコーヒーを入れて下さり、それをすりながら、若げのあつかましさで、時のたつのも忘れて文学論争などをしたりした。何回位渡辺邸にうかがつたか覚えないが、二度お嬢さんがこられておる時にでくわし、そのうち一度は御主人の石黒氏と御一緒であった。その時はいつもは静か

んの所にお邪魔し半日近く過したことがあつたが、帰路につくと開拓村の入口までわざわざ送つてこられ、私は元来足がおそい方だつたが、今日は岩波歩調で送つてきましたよといつて笑われ恐縮したこともあるたし、その折初対面の川上君に別れぎわ、煙草に乏しいねなさいといつて何本か渡された。しばらくしてふと振り返ると尾崎さんは畠中の道を急がながら盛んに手をふつておられ、不明をはじて僕らも急いで応答していると、ずいぶん距離ができるのに急に、岩波さん、講演会の折の写真代はいいですかといわれ、僕らは深くおじぎをして立ち去つたのだった。その時、何故か、すこし前菊岡久利氏が日本未来派に、同誌を寄贈のつもりで送つていたのに岩手の山のなかから、高村光太郎氏が、三年分の講読料を送つてきたと、感動をこめて書いてあつたのを思いだした。

尾崎さんは一方的にお世話をなつたまゝお別れしてしまつたが、あとにもさきにもたゞ一度だけちょっぴりご恩がえしめいたことをしたことがある。二十七年八月創元文庫から詩集を出版されたのを機に、それ迄も何冊か署名入りの詩集を頂いていたが、原田勇氏と発起人になり、諏訪市の諏訪湖ホテルで詩集出版記念会をもつたことである。当日は片山敏彦さんを始め、尾崎ファンであつた牛山大六氏、それに宮芳平氏など含め三十人近くが集まり、楽しい一日を過した。

二十八年一月一日発行の「つめくさ」二十号に筆者は次のように書いている。

六年にわたって富士見高原に居住され、信州の風物をあまたうたわれると共に、地方人にさまざまな影響を与えていた尾崎さんが、郷里東京に帰られた。やむをえないことであるけれども寂漠の情を禁じ得ない。本年七月以来、蓼科で仕事をしていた片山さんも十月東京にひきあげられた。文化的冬季を迎えるわけであると。

今にしておもえば、尾崎さんは富士見がふさわしく、片山さんにとっては当時の蓼科がにつかわしかったのかも知れない。

(「高原の自然と文化」第4号より転載)

筆者は元長野県衛生部長

三十年近く前の夏、『立体・ドイツ文学』という本の執筆を始めたころのことである。姉妹編の『立体・フランス文学』を担当する篠沢秀夫氏が軽井沢で仕事をするというので、私も出版社が借りてくれた別荘へ行つて仕事をすることになった。その別荘は旧軽井沢の万平通りに近い落葉松林の中についた。さぞかし快適に仕事ができるであろうと期待して出かけたところが、その年の七月は、くる日もくる日雨ばかりで、たまにやんでも濃霧が霧れることはなく、湿度98%という日の連続であった。じめじめとして寒い上に、薪が湿つて風呂も焚けず、洗濯物も乾かず、散歩もできないありさまで、ほとほと参ってしまつた。別荘を借りてもらつて仕事ができないというのでは何とも申し訳が立たないのだが、どうすることもできなかつた。

こんな状態で、仕事もろくに進まず鬱々としているときに、ふいに、中学生のころ数日間滞在したことのある、八ヶ岳山麓の富士見高原の光景が、あの清涼な乾燥した空氣とともに、まぶしいほどの明るさでまざまざとい出された。矢も盾もたまらず、私は富士見へ行つてみた。期待に違わず、富士見高原は想像していた通りのすばらしい気候と風光で私を迎えてくれた。まず役場へ行つて相談すると、幸運にも小池音三さんという方（後に助役になられた）の、実家が空いているので貸してもよいということであった。その家は、富士見町から三キロほど八ヶ岳側に上つた立沢という村落にある大きな農家であった。行

つてみると、そこは、まるでシティーフォーの小説に出でてくるような美しい村であった。南には、鋸岳、甲斐駒ヶ岳、鳳凰三山が一望でき、北には八ヶ岳の樹林を背負い、立場川の谷が開けたところにある実にすばらしいところで、私はすっかり気に入ってしまった。早速借りることに決め、私たちは早々に軽井沢を引き払つて立沢へ移つた。

軽井沢とは打つて変わつて、富士見町立沢は連日晴天で、なによりも湿度が50%位なのがありがたかった。これが仕事の方にもよい結果をもたらしたことは言うまでもない。翌年の夏もその家を借りて、どうにか四百頁近い本の原稿の大半を仕上げることができた。この書は一九六九年に刊行された。この仕事の合間の散歩の折などに、私は、富士見高原を初めて訪れたときのことを、そしてそのときただ一度お会いしただけなのに、私にとってはずつと心の師でありつづけた尾崎喜八先生のこと何度も思い出していた。

「小さい旅人」

ことであつた。尾崎先生のお名前は、吉田精一編『私たちの詩集』(筑摩書房版中学生全集4)に載つてゐた「高層雲の下」という詩や、家にあつた隨筆集『山の繪本』を読んで知つてゐた。

私たち一行は、新宿から列車に乗つて富士見へ向かつた。誰も知る人のいない団体旅行にひとりで参加するといふのは、私にとって初めての経験で、それだけに何もかも印象的であつた。まず、はじめて乗つた中央線にトンネルが多いことにびっくりした。当時、トンネルの長さが全国で第四位で、小仏トンネルが十六位であつた。甲府で電気機関車から蒸気機関車に変わつて、スイッチバック方式で坂をジグザグに上つて行つたのも珍しかつた。左の車窓からは、鳳凰、甲斐駒、鋸などの南アルプスの山々、右の車窓からは、茅ヶ岳、奥秩父の山々、そして雄大な裾野を広げた八ヶ岳が見えてきて、あこがれと郷愁の思いをかき立てられた。小淵沢あたりから信じられないほど涼しくなり、土手に咲く美しい野の花を眺めているうちに、中央本線で標高随一の富士見駅に着いた。

私たちは「白林荘」という犬養木堂の別荘に泊つた。見事な白樺や赤松の林に囲まれた広大な別荘であつた。

シカの毛皮を下げておられた。これは、野外でどこにすわつても座布団の役目をするので、大変便利なのだという。先生のお顔は、太い眉毛と、口髭がいかめしく、ちょっとこわい感じであつたが、お笑いになると眼が優しかつた。偉い先生なので、とてもお話しすることなどできないと思つていたのに、先生は誰にでも気やすく話しかけて下さるので、人一倍内気でひつこみ思案な私も何度かお話しすることができた。

先生の案内では金無川畔の武智鉱泉へ向かつた。道々、先生は子供たちが採つた昆虫や植物を、ただ名前だけなくそのいわれや特徴まで、即座に的確に教えて下さつた。私は夢中になつて蝶を採集した。初めての採集品もたくさんあつた。ヤマキチヨウ、ホシミスジ、キマダラモドキ、オナガシジミ、ミヤマシジミなどである。その中にひとつゼフィルスに似た蝶で名前のわからぬものがあつた。ボロボロになるほど図鑑を見て、日本産の蝶はほとんど覚えていたはずなのに、いざ实物を手にしてみると、わからなかつた。それで尾崎先生にお見せすると、「ほう、よく知つた」と微笑しながら褒めるようになつて、その子の顔を見てくれたのには、ああ、私として何かしら涙ぐまづにはいられなかつた。

翌年、尾崎先生はこのときのことを「小さい旅人」という題でまとめられて、NHKのラジオで朗読された。またこの文章は、『碧い遠方』(角川文庫・一九五一年)に収められた。私は娘から連絡を受けてそれを聴き、読んだとき、びっくり仰天した。その中に私が二度も出てきたからである。最初は前述の「ミヤマカラスシジミ」の箇所で、二度目は、このエッセイの次のようないい結びの箇所である。

しかし、道の片側の山からの清冽な水の流れている或る部落を通りながら、一むらの背の高い草を指して、「ではこの草は何というか、誰か知つている人がありますか」と私の方から聞いた時、一人の男の子が「麻です」と答えるのを聞いて、通りかかった村の大人が、「ほう、よく知つた」と微笑しながら褒めるようになつて、その子の顔を見てくれたのには、ああ、私として何かしら涙ぐまづにはいられなかつた。

「麻です」と答えたのが私なのである。これ

東京よ、私はお前を愛する！

そして信州よ、私はあなたに礼を言う……

を読んだとき、懐かしい気持や、晴れがましい気持よりも先に、何とも申し訳ない、どうしたらよいかわからぬ複雑な思いを感じたのを、はつきりと覚えている。それは、「もうこの信州に五年間住んでいるものの、私も古い東京のまんなかで生まれた。その東京から遠くやつて来た子供たちだと思えば、何となく懐かしくもあれば親身の者のような気持になる。どうか軽薄な真似をしたり心無しのわざをしたりして、土地の人たちの贊美を買わないように、土地の子供たちの無言の非難の眼を浴びたりしないようにと、思いにあれば願いもまたおのずから口に出た」と、尾崎先生は、林間学校の生徒たちが東京から来たと思って、そのことに特別の感慨をもって書いておられるのに、よりによって私だけが疎開先の栃木県から参加したからである。しかもまったくの偶然とはい、栃木県は麻の栽培の本場である。——しかし、子供心に感じたこの複雑な思いこそ、この思い出を一層忘れ難いものにしてくれたようと思う。

尾崎先生が東京の上野毛に来られてから、年賀状を出したことがある。富士見高原をイメージして彫った山と白樺の版画に、「小さな旅人のひとりです」と添え書きをしたようだ。これに対して、毛筆で署名のあるお葉書をいただいて感激した。その後も、自分で気に入った版画ができたときだけ年賀状をさし上げたが、そんな気まぐれなものに対しても先生は毛筆のお返事を下さった。

その後も思い切ってお手紙を出してお訪ねしてみたいと思ったことも幾度かあったけれど、結局、度し難い優柔不斷な性格と、余裕のない生活を送っていたことのために、果たせず、結局私が尾崎先生にお目にかかることができたのは、後にも先にも「小さな旅人」の時のただ一度だけになってしまった。

カロッサと尾崎先生

子供のころから動物や植物が大好きであった私は、東京に戻って、高校に入つたばかりのころまでは、将来、動・植物学か農学の方面に進みたいと思っていた。ところが、中学時代には何でもなかつた数学がいつの間にか大の苦手になつて興味を失い、ついに「解析I」の単位を落とす羽目になってしまった。こうして、どこかの国立大学へ入つて動・植物学をやりたいという初志は早くも挫折して、私の興味は急速に文学に傾いて行つた。ちょうど全集ブームが始まつた頃で、私は受験勉強などそつちのけで、世界の文学を片端から読んでいった。

私の高校では、英語のほかに、ドイツ語、フランス語、中国語が開講されていて、私は第二語学を選ぶとき、ドイツ語にするか、フランス語にするかでさんざん悩んだ末にドイツ語に決めた。一応の読書遍歴の末に、特に親しみを感じていたシュティフター、リルケ、ヘッセ、カロッサ等の作品を原語で読めたら、という希いが決め手になつたよう思う。現在ドイツ語で飯を食つていることを思うと、

これは私にとって決定的な選択であつたわけである。また、当時クラシック音楽にも夢中になり、初来日したカラヤンやケンプの演奏会を、小遣いをはたいて聴きにいったり、登山に夢中になって、南アルプスや奥秩父の山に登つたりしたけれど、今思ひ返してみると、これらはすべて尾崎先生の影響であったかもしれない。

こうして私は、大学、大学院ではドイツ文學を専攻することになった。卒業論文（一九五九年）や修士論文（一九六一年）には、ハント・カロッサの作品を愛読していたことのほかにもうひとつ理由があつた。当時、ドイツでも我が国でも、カロッサの第二次世界大戦中の生き方をいろいろと批判し、あたかもカロッサがナチスに屈服し、戦争に協力したかのよう言つて、その文学まで抹殺しようとする批評家が現れた。その影響で、カロッサを敬愛している人たちですが、まるで古傷に触れまいとでもするかのよう、この時期のカロッサについて語るのを避けたり、この時期のカロッサについて語るのを避けたり、この

時期のカロッサの生き方を汚点のように考えたりする傾向が見られた。私にはそれがどうにも納得がいかず、我慢がならず、その反論を試みたのである。

私は、尾崎先生の場合にも同じような問題があることを知つた。そして尾崎先生の場合もカロッサの場合と非常によく似ていることが判つた。そして私はどちらの場合も、自己審判ならともかく、他者から非難されるいわ

ではないこと、そして批判は取るに足らぬものばかりで、ほとんどが批判というよりも、混乱の時代につきものの誹謗・中傷のたぐいであることを確信した。

一九六五年、私に専門分野での初めての仕事が与えられた。三修社から「ドイツの文学」全十二巻が刊行されることになり、その第六巻カロッサ編を西義之氏と受け持つことになつたのである。私は『幼年時代』と『詩集』(抄)の翻訳と「解説」を担当した。この書は翌年の二月に出版されたが、その月報に、思ひがけなく尾崎先生の「カロッサの教訓」というすばらしい文章が載つた。まったく思ひがけないことで、私はうれしかった。このときは、何としても先生に手紙を書こうと思つた。しかし、ああ、何と愚かなことだつたらう。筆無精の私は、思いばかりが心にあふれて手紙が書けなくなつてしまい、もしかしたら再び尾崎先生にお目にかかるかもしれない絶好の機会を無にしてしまつたのである。

「富士見に生きて」

『立体・ドイツ文学』の仕事が終わつた一九七〇年の夏も、立沢の農家を借りた。そしてますます富士見が気に入つてしまつた私は、どこかに譲つてもらえる家がないものかと探した。そして、武智川のほとりの横吹というところに土地つきの家を求めることができた。その場所からは八ヶ岳も南アルプスの山も見えず、建物も別荘風の家ではなく、古材で再



左の写真は文中の「林間学校」の際のもの。

翌年の二月に出版されたが、その月報に、思ひがけなく尾崎先生の「カロッサの教訓」というすばらしい文章が載つた。まったく思ひがけないことで、私はうれしかった。このときは、何としても先生に手紙を書こうと思つた。しかし、ああ、何と愚かなことだつたらう。筆無精の私は、思いばかりが心にあふれて手紙が書けなくなつてしまい、もしかしたら再び尾崎先生にお目にかかるかもしれない絶好の機会を無にしてしまつたのである。

筆者は現東洋大学教授

松の美しい木立の中に建てられ、たくさんの人びとが集まつていた。このとき私は初めて実子奥様と栄子様にお目にかかり、ためらいながらも「小さい旅人」の話を申し上げた。お二人とも大変喜んで下さり、初めてお会いしたとはとても思えないほど親しくしていた。

だいた。このとき、私は何か長年胸につかえていたものがとれたような晴れ晴れとした気持になつた。

敗戦による貧困と混乱と飢餓の時代を迎えたのは全国すべてであつた事は言う迄もないが、私の生れ育つた長野県諏訪郡富士見村目集落にとつては、三十三戸の中、十戸の身ぐるみはがれて故国に戻つた開拓団引揚家族と、指導的役割を担うべき有能の先輩達十名の戦死者を出した打撃は大きく、その立地条件も入笠山麓標高千米の傾斜地を農地として保有する恵まれない地形にあって、どうやつて各自の生活を保ち、将来への道をきり開いてゆくかが当面の急務であつた。

そこで若い者達が知恵を出し合い、力をあわせて実現を期した目標は、地力増進のための畜産化・万難を排しての耕地の集団化、精神面での融和と協同化、一步進んで生活の合

建した粗末な家であったが、私はそこがすっかり気に入った。こうして海外へ行った数年間を除いて、毎夏そこで過ごすようになつた。近隣の人たちのほかは、町の人とも別荘の人ともほとんどお付き合いすることもなく、昆蟲や植物を相手にひつそりと暮らしていた。

農村の復興に誠意を 込められた尾崎先生

名取正人

当時 農業・松目集落区長

理化のため農家の台所改善をする等の事業を進めて行く事にあった。集落全体が一致協力して励んだ結果、昭和二十四年度には優良種

子馬鈴薯生産集落として農林大臣賞を、二十一年度知事賞を、二十六年度には長野県及び県教育委員会主催の生活改善モデル集落推進会で入賞を果すことになる。

今振り返って思えば、青年団の若者たちが氣力に満ちみち、快い討論を交わし、ハンディの多い高冷地農業の困難を克服する為に心をあわせて行動したあの頃の日々は、真に何にも代えられぬ我々の輝かしい青春であつたと懐かしく回想するのである。我々のモットーは傍観者にならない！ 理想を持つものは何か行動をする！ であった。

そんなさ中に尾崎先生との交流が始まるのである。

我々は芝平地籍（松目の農地の中で最も標高の高い所）に共同農場を設け、つねに採種、品種改良、病害虫防除等に注意を配る傍ら、生活文化の面で老若男女一丸となつて俳句会をする事になる。既に青年団の人達は度々尾崎先生をお招きしたり、分水荘に伺つてお話を聞いたりしていたが、集落で定期的に俳句の指導をお願いしたいという事になり、快く引き受けたのが松目全体とのつながりの始めであった。以後東京へ帰られてからも当分の間郵送して選評を続けて頂いた。

俳句の指導以外でも、松目気象観測所設置についても細部に亘り指導を受け、大半の観測器具を提供して頂き、観測記録は当時の中

学生が担当したのである。

昭和二十七年「信毎（信濃毎日新聞）農業技術表彰会」に参加して「特選」に入選して、

授賞式に長野迄河角巖君（二十四歳、農業実行組合長）、樋口勉さん（三十歳、農業指導員）、と私（二十七歳、松目区長）の三人が出席し二十万円の副賞を戴いて帰り、程なく開かれた集落での受賞祝賀会には尾崎先生ご夫婦を招待して盛大に行われた。しかし一同が喜んだのも束の間、新聞で大きく報道されたため県内はもとより全国からバスで団体が視察に訪れる。嘉納忠明さんが発掘して下さった当時の南信日日新聞の紙面をみると『ぞくぞくと押し寄す視察団』『富士見村松目、応対に悲鳴あぐ』の見出しで当時の困った様子が記してあり、張り切つた揚句に仕事が出来ず、各々が案内や説明で忙しい思いを暫く続ける羽目となつた事もあった。当時の新聞については嘉納忠明さんが信濃毎日新聞本社及び南信日日新聞本社を訪れ、沢山の資料を収集、それを我々に贈られたのには驚き、一同思い出を新たにしながら感謝している。

この当時の諸事業や尾崎先生との関わりについて既に皆さんがご承知の先生の散文「詩人」の一部分や、『松目句集』一号の巻頭文、それに『尾崎喜八資料』四号に発表された町田梓楼氏の隨想をもう一度このような背景のもとで読んでいただきたく、編集部にお願いして載せていただく事にした。

或る日私は部落を登りきつて高みの開墾地へ出た。六月の初めだった。そこには彼ら青年の五六人が最近に作り上げた共同圃場で働いていた。原種玉蜀黍の或る種類と別の種類とを交配して、その一代雜種から収量の多いすぐれた種子を得ようとするのである。二種の玉蜀黍は既にそれぞれ長短の苗を整然と並べていた。青年たちはその共同の圃場で草を

「詩人」抄

石置屋根と白壁との古い堅固な家を奥へ奥へと雛段のよう積み上げて、坂になつた狭い村みちの両側に清冽な水を走らせ、家々の前地衣にいろどられた石垣の隙間をうすめるように、薄紫のおだまきや桃色のフロックス・ドランモンディーを咲かせた部落。私はこのごろのように自然のあらゆる色彩が純粹な初夏の日に、あるいは落葉撞く熊手の音が裏の山からさざなみのように聴こえて来る晴れやかな晩秋に、この古くて清潔な山麓の部落をたずねるのが好きだ。自然を背景とした村の形や家々の内部と外觀とが心を悦ばしめるばかりでなく、私に親しい青年男女が指導力の中心となって、農業經營に新しい知識や技術を取り入れてゆく一方では、部落全体の生活にいきいきとした生氣を吹き込み、風儀を正すことに力を尽しているからである。そして最も感嘆すべきことには、彼らの祖父母であり両親である人々が喜んでその指導に服しているのであった。

或る日私は部落を登りきつて高みの開墾地へ出た。六月の初めだった。そこには彼ら青年の五六人が最近に作り上げた共同圃場で働いていた。原種玉蜀黍の或る種類と別の種類とを交配して、その一代雜種から収量の多いすぐれた種子を得ようとするのである。二種の玉蜀黍は既にそれぞれ長短の苗を整然と並べていた。青年たちはその共同の圃場で草を

取つて行つた。そして近づいて私を見る
と、やがて休憩することになつて近隣の林か
ら枯枝を集め、アルミの大薬罐で湯をわかし
茶をいれた。眼の下から起こつて湧き上るよ
うに展開した八ヶ岳の大裾野は、ところどころに雲の影を遊ばせて、その雄大の効果を一層強めていた。

車座になつて茶を呑んだり雑談をしたりし
ているうちに、青年の一人が私の膝の陰の書
物に目を附けて、「先生、その本は何ですか」
とたずねた。土地の農学校を出たばかりの、
文学を好きな若者だった。「これ? これはフ
ランスの詩の本」と私は微笑しながら答えた。
本はフレデリック・ミストラルの「ミレイ
オ」である。プロヴァンス方言の詩句とフラン
ス語の詩句とが対頁になつて、危うく戦
災をまぬがれた古い記念の一冊だった。
やがて私は一同から乞われることになつた。
初めのあいだ彼らの顔には幾らか戸迷いの表
情が見えた。しかし暫く続けていくうちにこ
の南フランスの巨匠の魔力はおもむろに日本
信州の青年たちの心をとらえて行つた。詩の
結構が壯麗であり、物語の世界が田舎と農村
であり、人間や自然の身振りが古代のようにな
らへて、しかも主人公たちが彼らと同様に若く且つ純だった。それで私が彼らの退屈
をおそれて止めようとすると、却つて彼らの方
から「疲れたでしようがもう少し先を聽かせて下さい」と頼むのだった。

湯沸しの焚火がとうに白い灰となり、八ヶ

岳の連峯に青い影がうまれて、この高みの開
墾地を吹く六月のそよかぜにも冷えびえとし
たものの加わって来た頃、私は彼らと別れる
ために立ち上がつた。すると私を開墾地の下
まで送ると言つて続いて立ち上がつた。いちば
ん年上の一人が、思い入つたような語調で言
つた。

「先生。今度来られたときには女子の人たち
にもぜひ聴かせてやつて下さい。お願ひしま
す」

彼は部落で篤い信望を得ている若い指導者
で、この土地に多い海軍の復員者の一人とし
て、戦争中は駆逐艦なにがしに乗つていた。

(新潮) 昭和二十六年七月号)

松目の俳句——「松目句集」巻頭文

ひとつの部落のほとんど全戸に俳句をたし
なむ人々があつて、その風雅の交わりを足場

に人心がなごやかさを増し、互いの親しみが
深められ部落の自治經營のすべてに於いて、

(富士見時報より)

協同の精神が發揮されると言う事は、もつぱ
ら芸術にたずさわりながら、しかも一方では
自分の愛する信州で農山村の正しく健やかな
進歩発展を常に乞い希つて、私は本当に嬉しく
限りである。単に俳句の好きな人がいるとかいうだけ
が多數いるとか上手な人がいるとかいうだけ
の事ならばこの際私は大して問題ではない。
問題はひとつの部落の中に芸術を愛し尊重す
る氣風が存在して、それが大部分の人々の生
活を養い育て、一方ではさまざま協同の精神

農村と協同精神

町田梓樓

業を円滑に実行させる力となり又他方では部
落の風格に情操の美を添えているという所に
ある。そういう部落は無論よそにもあろうと
思うが私の知つてるのは富士見村の松目で
ある。松目の人達は本職の俳人でない私をつ
かまえてどういうものか此の一年間彼等の作
品の選者の一人に加えている。それで句会の
たびに三百句を越える出句を見ているが、会
を重ねるごとに優秀な作品が多くなるのを知
つて驚くのである。前に述べたような私の主
目的から云えば句の上手下手はむしろ第二義
の問題ではあるが、俳句もまた芸術作品であ
るからには拙い作品よりもすぐれた作品の方
がよく、優秀な句の多い方が少いよりもいい
ことはいうまでもない。部落の人それぞれの
生活から満ちこぼれた詩精神や心ばえの美し
さを思えば私の短評などはむしろ蛇足に類す
るかも知れないのである。

信毎農業技術表彰会が年を重ねていよいよ
成果を挙げつゝあることはうれしい。七月五
日行われた第三回表彰式の席上、審査長笠原
県經濟部長の審査報告の総評に、「何等かの
原因によつて一時的苦難に遭遇した場合、青
年を中心として友愛、協同の精神を奮い起し
て責任感と義務実践をもつて推進していく」
とあるは特に注目すべきである。また今年特

選に査定された諏訪郡富士見村の松目農業実行組合、一等となつた下伊上郷村の丹保農事組合、二等の下高平穂村の吉沢農家組合をはじめとして、各部落とも総じて「特に婦人層の自覚が急速に高まつて来て、生活文化の向上に目ざましい活動を示し……」とあるは誠に喜ばしいことである。農業技術表彰会の直接の目的は、農村生産の増進にあることはいうまでもないが、同時に農民の生活水準を高め、文化の向上に寄与することが望ましいのである。

七月五日の表彰式後、松目農業実行組合の代表に、「尾崎さんがよろしく申されました」といわれたとき、私は始め見当がつかなかつた。フランスの知名な劇作家ヴィルドラック氏が日本に来遊したのは二十数年の昔である。詩人尾崎喜八の名はフランスの劇作家にも親しまれたと覚しく、私も時々尾崎氏のことを聞かされたものだが、その尾崎さんが、ずっと前から松目に住んでいることを知らずにいた。笠原審査長の松目部落に関する報告中に「生活、文化の面においてこの部落の特異とすることは、二百年の伝統を持つ儒教（時中倉）の運動を近代化して、生産と生活の深味を発見し、農民生活を楽しむ態度である」と述べ、「詩人尾崎喜八氏がこの村に住んでいるので、その指導を受けて全部落で俳句会を作り……」とあるのを見て、私は驚きもし喜びもしたのである。詩に縁遠い私と尾崎氏との関係はフランスの作家を通じてのことである。その尾崎さんが今郷土の一部落に落着いて、

青年の指導に詩人らしい意義ある生活を樂んでいることを知り、松目部落の特選また偶然ならざるを感じたのである。

ここに、松目農業実行組合の「句集」第一号がある。尾崎さんの序文の一節に「…単に俳句の好きな人が多数いるとか、上手な人がいるとかいうだけのことならば、このさい私は大して問題ではない。問題はひとつの部落の中に芸術を愛し尊重する氣風が存在して、それが大部分の人々の生活を養い育て、一方ではさま／＼な協同の事業を円滑に実行される力となり、また他方では部落の風格に情操の美をそえているというところにある」とある。詩人の言葉は味うべきである。

（中略）

国民の協同精神というようなものは、短い年月で養われるものではない。何かの要綱などで一日にして育成されるものではない。実際に生活の中に識らず知らずの間に育つのである。また、そうでなければ、身についた健全な精神にはならない。松目部落の「句集」を見て感じることは、尾崎さんのいう通り、「句の上手下手はむしろ第二義の問題」であることだ。尾崎さん自身すでに本職の俳人ではないが、俳句も詩の一つの形である。心は同じである。同じ意味でこゝに転載するのも句の優劣を評するためではない。部落の人おののの生活をしのぶよすがである。

純潔を誓ひ若草ふみ帰る。

入学の子供のひとみまつすぐ。

お隣へうどうの初切り子に持たせ。

ねこの顔うつる沼水ぬるみけり。
手をふれば手をふり答え麦をふむ。

（「信濃毎日新聞」昭和二十七年七月十四日）

名取定一様
おとつひは御言葉に甘えて参上いたしましたが、一方ならぬ御歓待にあづかりまして、

まことに御礼の言葉もございません。

御家庭の雰囲気の深さ和やかさにも感動いたしましたし、若御夫婦、御兄弟、御姉妹皆様の睦ましいのにも心を打たれました。

夜の俳句の会では、其の道には浅学の自分ゆゑ致し方もありませんでしたが、部落の皆さんとの親しみの情景も忘れ得ぬものとして今も眼前にある思です。

たゞ一つ氣掛かりなのは、帰り道で妻にも言はれた事ですが、御座敷の床の間の、あの関羽の軸を、なぜ立ち上がりつて篤と拝見しなかつたかといふ一事です。御長男の未来を祝福なさる御心から手に入れられたといふ逸品を、たゞ振り返つて見ただけの自分を今更に後悔してゐる次第、これは妻から批難されて、まこと其の通りであつたと、今も尚背中に汗を覚えます。実はほかの御話に氣を取られてゐたために、それほど粗末に考へてゐたのではないかに、つい、立ち上つて絵そのものと讀とを賞美する心のゆとりが無かつたとでも申せば、それが正直な言訳なのですが。

深い夜空に一抹の雲もなく、晴れわたり澄みわたつた天のまんなかに満月があり、立沢・羽場あたりの遠い部落の電灯のちらちら光る大八ヶ岳の雪の裾野眺めながら帰つたあの道は、限りなく私達を悦ばせました。松目からの夜道を知らぬ妻にとつても、あの輝かしい積雪と月光との冬の夜の大観は、生まれ初めての体験であつたやうでした。

(後略)

現農業・富士見尾崎会事務局長

当时、私の父も母も健在であつて、喜んで接待して上げた記憶が残つてゐる。その折、

尾崎先生を偲ぶ

昭川細
當時 小・中学校教諭

尾崎先生は色紙に俳句を揮毫されて残された。その色紙は、後に兄が記念に持参していくので、現在若宮のここにはないが、今も私の家に残る木槿垣を詠われたことと、行人とのお話を魅せられ、花が咲いていた。

多分その日の夜であつたか、或は、もう少し後であつたか、私は兄や同じ数人に誘われて、尾崎先生のお住居（当時、渡辺別荘とも分水荘とも言つていた）へ訪ねていった。当夜の印象の中で、ドイツ詩に対する卓越したご意見をさわやかに語られる先生の面差、またヘルマン・ヘッセとの交流の数々を語られる先生の口調は忘れられない。そして、昆虫論（夜の昆虫の探索法も含めて）・絵画論もお聞きすることができた。座の賑わう中で、私が絵画を始めていることなどを、どなたかの先生が告げた模様で、尾崎先生は私に、「あなたは今、誰の絵にいちばん魅力を感じているかな」

と、問われた。この頃、私は色彩の上から、ボナール（仏・一八六七—一九四七）にたいへん関心を寄せていたこともあって、そのことをお答えした。すると、先生は立ちどころに、次のようなことを語られた。

「良い作家を指標とすることはだいじなことです。ぼくもボナールの色彩は大好きです。フランスのレオン・ウェルトという美術評論家は、『ボナールの描かない部分の白地の一

平方糸の価値は、描いた部分と同様にすばらしい絵画上の意味をもつていて、多くのアーティストの画家達のぬり固めた広い画布のそれよりも数段の高価値をもつていてる』と言つています。セザンヌ（仏・一八三九—一九〇六）なんかも、描かないところをもつてますよね』

私はぎくっとした。というのも、このことについて私は学生時代みづゑで『また別種の画一主義』というウェルトの論文を読んでいたこともあり、また、同人誌にウェルトの思想も載せたこともあって、たいへん関心事であつたからである。先生のお言葉が、同感の意味も含めていたく響いたわけである。一事に精通された方の広さ、博学さに驚いた次第であり、先生の底辺は富士山のように広範度もある。なお、先生は生涯アルプス高原に住んだ天才画家セガントイー（伊・一八五八—一八九九）の透明感溢れる山岳の絵にたいへん魅力があることも語られ、「自然感情の横溢した詩的表現である」と讀えておられた。その後、自然観照の卓見も抒情することができた。泉が次から次へ湧いて来られる先生であった。

物資の乏しい世の中でありながら、奥様からはたいへんなおもてなしを受けたことを付記しておきたい。

昭和二十五年末頃、星雲詩話会が誕生した。

富士見小学校・金沢小学校・落合小学校等南誠の小学校の先生方を中心として結成された

芝」を発刊している。その一節の中で「私の開眼をもたらしてくれた先生よ」と敬慕の念を詠つている。

第三話

に星雲創刊号が、三月には第二号が発刊された。ガリ版刷りの冊子であるが、当時としてはなかなか画期的なことであつた。編集者の久保川さんはたいへん苦労されたと思うが、よく纏めていただいた。尾崎先生は創刊号には「夏の小鳥が」、第二号には「地衣と星」を寄稿されており、お手本を示されている。因に発表者の数をあげると、創刊号では会員十八名、児童七名となつており、第二号では会員十七名、児童十名となつていて。発表者はこのようであるが、会員は三十名を数えていたと思う。

尾崎先生が寄稿された二つの詩は、後に発刊された『自註 富士見高原詩集』（鳥影社）に、ともに推敲修正され上梓されている。先生の感動の所在を示しつつ、温かな心情を吐露されたすばらしい作品であると感銘した當時を思い起こすわけである。

星雲詩話会の方であるが、会員の方々の転勤等々で消息が絶え、第三号の発刊は無かつたよう記憶する次第である。しかし、会員の中には先生との出会いを基盤に詩作を続けている方もあったようと思う。私の実兄もその一人で、これから先、先生の薰陶を受けつつ詩作を続け、昭和三十一年に詩集「枯

が落合小学校在職中の頃、高学年の或る組で詩の授業があつた。その折は国語の係の先生（平出さん）が中心となって講師に尾崎先生をお招きした。研究授業の批評会の折、適切なご指導をいただいたが、その席で、尾崎先生は草野心平の「ねこ」を朗読してくださった（黒ねこであつたかもわからない）。今まで私はラジオ等を通して短歌の朗読はよく耳にしたことがあつたが、このような大先生から直接詩の朗読をお聞きすることは初めてであつた。長い戦争の後の疲弊は、日本の到るところに残つていて、教育社会の中にも、眞の詩作のゆとりや、ラジオでも詩を朗読して全国に知らせる余裕も無かつた頃である。私は魂を抉られるような強い衝撃を先生の朗読から受けた。それは眠っているものを一喝によって呼び醒ますとでも言つていいような鋭い活力を持っていた。詩は心の音声とでも言えるのであろうか。詩のほんとうの朗読といふものを教えていただいたように思う。先生のお声は今も心底に残つていて忘れられない。

それから暫く経つてからの退校時過ぎ、尾崎先生が学校へひょっこり私を訪ねられた。先生は自然探索のお帰りの途中、お寄りにな

つたものと思われた。登山姿で皮のゲートルと地下足袋を召されていたようと思う。お客様に誘われた結構であつたが、たいへん光栄に思ひ、舍外に出て先生の後に従つた。

芝生に腰をおろされた先生は、背に負つた真新しいしょいだわら（四角に編んだ藁作りの背袋で、當時貴重品であつた）と双眼鏡を外され、おもむろにお話しされた。学校のこと、詩作のこと、若い私どもに対する期待のことなど諄々と語られた。詩と彫刻のお話では、高村光太郎・荻原碌山の巨匠の足跡などを語られ、二人の偉大さも讃えておられた。

こうして、時の過ぎるもの忘れる語らいの時間であつたが、釜無川の渓谷が青紫色に沈む頃合い、先生はお立ちになつた。しょいだわらの中からフランスの友人からという葡萄酒の杯を取り出して私に下さり、

(1)

穂屋野会のこと

川嶋利哉

当時 高原療養所入院患者

現金と雇用機会を持ち込んだ入院患者は、それなりの存在価値が有つたかも知れません。とにかく明日の食べ物にも困る大変な時代でした。

私の入院した富士病棟は八ヶ岳の南斜面に位置した病院の、一番南側の二階にありました。ベランダへ出れば目の前に南アルプス甲斐駒ヶ岳が、左に鳳凰三山、右に鋸岳から釜無山系、入笠山を従えて、花崗岩の岩肌を雪渓のように白く目立たせながら見事なピラミッドを見せていました。足元からは緩い斜面に麦畑が続いており、その先の谷間に中央線の線路があつて、一日何回か蒸気機関車の汽笛と、白い煙がホームシックを誘いました。入院患者の誰もが、何時終わるとも知れない年単位の療養生活に精神的にも耐えがたい重圧を感じる事がしばしばでした。

「また、会おう」
と、おっしゃつてお帰りになつた。その時の先生のお姿は、慈父のようにやさしく、また毅然と大地に立つ岩頭のようにすつしりと重く私には感じられたのである。私はそこに暫く立ち、私達を惹きつけてやまない先生の心情、誰彼を問わず差別を避けて若い者を育てようとする先生の行為と心情のことを思いやつたわけである。頭の下がる思いであった。

私のこれまでの生活の過程の中に、詩或は詩的なものがあつたとすれば、先生との出会いでも思い、感謝申し上げている次第である。

筆者は現富士見町文化協会会長

昭和二十五年の九月から昭和二十八年九月まで丁度丸三年間、私は、病を得てその頃久米正雄の「月よりの使者」が映画化され有名だつた、正木俊二（不如丘）先生の富士見高原療養所に入院していました。当時の肺結核患者は、まだストレプトマイシン発見以前の事とて、大氣・安静・栄養療法以外には手だけなく、丁度現在のエイズ患者のように世間を憚る存在でした。しかし、心優しい富士見の人達は、何の差別もなく（少なくとも表面上では）町の中を歩き回る患者達を遇してくれました。一方見方によつては、農業と林業以外には産業らしい産業が無かつたこの落合村富士見にとって、都会の空氣と幾許かの

療養所の隣の部屋に小林義郎さんがいました。東大薬学部の助手をしていた小林（俳号・蟻朗）さんは、つい先日元気になつて退院された同じ東大薬学部の先輩、朝比奈菊雄（俳号・落子）さんが始められた病院内の俳句の会、白樺句会の熱心なメンバーでした。機関紙「白樺」は、朝比奈さんの後をうけて加藤末彦（俳号・艸人）さんが編集していました。また病室の反対隣には甲州の製紙会社の御曹司、村松常男さんがいました。村松さんは病気になる前から始めていた短歌に熱心で、「高原」という機関紙を療養所の中で編集していました。こんな訳で入院早々の私は

となりました。結局私自身は創作という才能がまったくないことがわかり、専ら他人の作品を鑑賞させていただく『評論家』の方に回りましたが……

(2)

朝比奈さんは旧制松本高校の山岳部のご出身で、戦時中薬科大尉として軍艦に乗り込んでいた時も、「山の絵本」を密かに携行して愛読していましたと聞いています。療養所に程近い分水荘の森に尾崎喜八先生の仮寓があると聞き、畦道をたどりながら傷心の先生を最初に訪れたのは朝比奈蘿子さんでした。その後得意の一六ミリ映写機を分水荘に持ち込んだり、白樺句会の選者をお願いしたり、川上(山口)久子さん、西野五郎さん、小林さん、加藤さんなどと先生のお宅で夜遅くまで歌仙を巻いたり、大変親しいお付き合いが始まつたといいます。

小林義郎さんのお説いで私が初めて分水荘にお邪魔したのは、昭和二十六年の春だったと思います。初めてお目に掛かった尾崎先生は、思つたより小柄な方でしたが、鋭い眼と、

身元の二本の綻織と、優しい澄んだお声が印象的でしたが、何より圧倒されたのは十五畳位の大きな部屋の、一方の壁一面全部を埋めた蔵書の本棚でした。しかもその大半が英・独・仏の洋書であり、一部は初めて見たフランス式の仮装丁の本でした。そしてロマン・ローランの署名入りの写真と、ヘルマン・ヘッセの自筆の水彩画の小さな額を見せていました。その日どんなお話をうかがつたか、

殆ど記憶はありませんが、話題がドイツ歌曲語学校でした)僅かばかりのドイツ語の知識と、このショーマンが余程先生ご夫妻のお気に召したらしく、「おませなボーズ(信州弁でばうやのこと)」とのあだ名を奥様から頂戴しました。因みに私は当時二十歳、先生は随分ご老人に見えましたが、ほぼ二月前数えの還暦のお祝いをなさったばかりでしたから、今私のより大分若い五十九歳であった筈です。

その日から、尾崎先生ご一家が世田谷の上野毛へ移られる迄の一年余り、療養所の医師の目を盗んでは、山口耀久さんも加わっての尾崎詣でが続きました。若者の無遠慮さで、毎週のように片道小一時間の山道を越えて分水荘を訪れ、先生の該博な知識と高潔な人格に触れ心を洗われたような気持ちになり、その上お酒つきの夕御飯まで御馳走になって、冷たい夜風にその熱気を冷ましながら夜更けの病院に忍び込むわけです。今にして慚愧の極みなのですが、その頃の尾崎家の経済状況は決して余裕のあるものではなかつた筈で、随分先生や奥様の実子様に迷惑をお掛けしたものだと思います。

分水荘での先生のお話は本当に多岐にわたっていました。東西の詩論、文学論から、気象、地形・鉱物、天文学、鳥類、昆虫、植物、

制高等学校で詰め込まれた(旧制高校は殆ど語学校でした)僅かばかりのドイツ語の知識と、このショーマンが余程先生ご夫妻のお気に召したらしく、「おませなボーズ(信州弁でばうやのこと)」とのあだ名を奥様から頂戴しました。因みに私は当時二十歳、先生は随分ご老人に見えましたが、ほぼ二月前数えの還暦のお祝いをなさつたばかりでしたから、今私のより大分若い五十九歳であった筈です。

『富士見大学』(私達はそう呼んでいました)は大抵自然界の話題から始まりました。高原療養所の周囲や分水荘へ来る道すがら見聞きした植物や鳥や蝶、遠くに見える山々や地形について私たちの幼稚な描写を先生は「それはこうだったのではないですか」と正確に言ひ直されたものでした。

それから話題は東西の文学論や音楽・美術論に移つてゆくのですが、ここでも先生の「科学者の眼を持つた文学者」という態度は、常に鋭くその作者の描写や観察力を批判していました。そして何時もその根底には、暖かいヒューマニズムとユーモアがありました。また大正末期から昭和にかけての詩人との交友録も楽しくうかがいました。萩原朔太郎がパイプを片手に「おい尾崎君、何処かへ飲みに行こう」と言う真似など堂に入ったものでした。

美術、音楽。尾崎先生の知識は驚くほど広く、我々の知っていることがどんなに軽薄で生半可であり、どんなに貧弱で無価値なものであるかを思い知らされることでした。唯一つ先生が理解出来ない分野がありました。それは分子の世界で、小林さんの研究室での仕事、分子構造や立体化学については小林さんがどう説いても中々イメージがつかめないご様子でした。

えた明るい口調でゆっくりと。私達は身を堅くし、耳を澄ましてその一言一句を聞きもらすまいとしたものでした。

(アルプ No.一九六・尾崎喜八特集、一九七四

年六月号より)

* * *

小林さんが退院される数日前、先生はこのグループに名前をつけようと仰って、半紙に墨痕鮮やかに「穂屋野会」と書いて下さいました。穂屋野とは霧ヶ峰から富士見にかけての古称だそうで、芭蕉の句に「雪ちるや穂屋の薄の刈り残し」とあります（もつとも芭蕉が冬の時期にこの地方を訪れた記録は無く、虚構の句とされていますが）。御射山神社の神事に使われる萱とすすきで建てられた小屋を穂屋といい、つい先日までこの地方に残っていた独特的風習であったといいます。

(3)

穂屋野会の仲間は奇蹟的に全員全快し、東京に戻ることが出来ましたが、何時とは無しに毎年、先生のお誕生日、一月三十一日前後の日曜日に上野毛の、後には北鎌倉の先生のお宅にご招待して下さる事になりました。この頃の穂屋野会は、朝比奈、小林、加藤、村松、西野、山口、同夫人（旧姓川上）、川嶋の他に、栄子さんの夫君石黒光三さんと私の友人の野本元さん夫妻が加わって大人数が栄子さん得意の中華風の御馳走に歓声をあげるという次第でした。尾崎先生のお仕事も最後の『傑作の森』の時代を迎える、詩に、隨筆に、翻訳にと充実した時期でありました。

筆者は現川嶋産婦人科病院院長

この集まりでの先生と朝比奈さんとのやりとりは、ユーモアと、諧謔と、深い知性と批判精神にあふれた（そして一寸駄洒落も加わった）誠に見事なもので、これに時々ご一緒に軽田さんを交えて丁々発止の対話は、他のものが口をはさむ余地の無いほど素晴らしいものでした。残念なことにこれらの記録は全く残されていませんし、記憶もすっかり失われてしましました。小型の録音装置が無かつた時代ですし、また一つには、このような楽しい集まりが永久に続くと、私自身が未熟な錯覚をしていたのかも知れません。とにかくこの会では、尾崎先生はすっかりリラックスされて、あの有名な眉間の二本の縦皺も殆ど見えない程でした。奥様もよく「穂屋野会の方々が見えると、尾崎は本当に機嫌が良いのよ」とおっしゃって居られました。

月日が経ちました。先生が亡くなられても

う二十年になります。穂屋野会の仲間も、西野、石黒、加藤、村松と次々に欠けてゆきました。残った者も年一回、蠟梅忌で顔を合わせるだけになってしましました。残念なのは、山口耀久さんを除いて、この会から文学上の先生の後継者が現れなかつたことです。しかしこの会の存在が、波瀾の富士見時代を含めて、幾許かでも先生のお慰みに役立つていたとしたら幸いです。



分水荘を訪れた高原療養所の入院患者。

旅への喜八崎尾

その五

伊藤海彦

さきに記したように当時私たちが仮すまいをしていたのは諏訪大手町の置屋の、棟つづきではあるが小料理屋風の部分だった。だから玄関や階段、二階の部屋などその頃としてはぜいたくと思えるほどの広さだったが、生活をするとなると当然のことながら不便で奇妙なものだった。その玄関を入ってすぐの所には四畳半の小間があり、二階で寝起きしてい私たちもそこで食事をとった。喜八が上諏訪にやってきて、この部屋で父と飲み交しながら食事をしたのは二度あるいは三度くらいあつただろうか。父は昭和二十二年の春すぐから体の不調を訴えはじめ、八月には死んでしまったのだから喜八とのこうした情景は前年の冬あたりからと考へてもわずか半年くらいの間のことだったのである。にもかかわらずその二人の生き生きとした様子は未だに印象づよく残っている。

それというのも喜八が私との二ツ折でぼろりともらした東京下町への郷愁が、同じ思いの父との会話ではずんだからである。二人は芝居やその役者たち、あるいは寄席や食べ物、町などの風情などについて酒が入るにつれ実に楽しそうに語りあつた。そのほとんどが戦災のため消えてしまつたものだから、いわばそのイメージ遊びの中に加わっていた若い私は楽しきのうちに敗戦のにがさや切なさを味わつたのである。

ところで四畳半には信州らしい大きな掘炬燵があったが、そのこたつ板は平のものではなく周りの縁が立ちあがつていて独特のもの

だった。何の木だったか忘れてしまつたが厚い重い材で面にも縁にも唐草ふうの彫りをほどこした紅殻塗りという鮮やかなものだった。私の記憶にまちがいなければそれは昭和の初年頃の農民芸術運動のなかで生まれた作品だったと思う。たしかこれと同じような座卓と書き机があつて、父はひどくそれを気にいっていた。昭和初年のたぶんそれを手に入れたばかりの頃、父は療養のため足かけ六年諏訪湖畔ですごしたが、その頃の写真にその座卓や書き机がうつっている。書き机は四隅を文様風の木の葉でふちどられ、足は動物の足……おそらく作者は獅子のつもりではないかと思われるものになつていて。その爪のある四本の朱色の足は幼い私にとって實にふしぎな魅力的なしろもので、一度あの机の上で自分も父のように原稿を書いてみたいと思つたものだった。書き机も座卓もその後の東京暮らしの間にいつか消え、疎開の荷とともに生きながらえたのがそのこたつ板だった。さすがにあちらこちらと傷んで塗りのはげも目立つていて、縁の合わせ目などにも隙が生じていた。その立ち上つている縁の角がなんといつたらいいのか、装飾的に三角の形になつていて。喜八はその形がひどく気に入つて「これはいい、猪口ちよをのせるのに實にぐあいがいい……」と何度もくりかえし言つた。酒がすこしはいつごきげんになつた喜八の表情やしぐさはなんとも小粹で、少々頑固だが筋を通せば實にものわかりのいい下町のおじさんといった感じで、さきにあげた二ツ折の

「どうくりと身の振方を相談に」「このごろ日

だつ叔父の白髪」……の情景そのものだった。

こうした喜八の一面は案外一般的には知ら

れていないのではないだろうか。著書の巻頭

などにある額にたてじわを寄せた氣むずかし

そうな写真からうかつには近寄り難い詩人と

受取る読者も多かった。実際私の仲間や知人

の間でも（その作品に敬意をもつている人で

さえも）小粋で洒脱な喜八というものは思い

うかばなかつたようである。私がそんな一面

を口にするとだれもがいかにも意外という顔

をした。何かというとこの詩人につけられた

肩書きもあるいはそんな誤解に近いものを先

入観として与えたのかかもしれない。理想主義

の詩人とか自然または山の詩人といった百科

事典風の分類はそれぞれその通りであつて決

してまちがいではない。ただ、その根の部分

にあつたものはいつも東京下町……それも明

治という時代の商家の息子「喜イちゃん」に

ほかならないと私は考へてゐる。

人は生まれながらになってきたものが終生

何らかの形でその人の人生に作用するものだ。

喜八の場合年少にしてあんなに熱っぽく西欧

の文学にひかれていたというのも秀才で語

学に堪能だつたというだけでなく下町の商家

という環境への反撥がその背中を強く押して

いるのである。のちの山や自然への傾倒もお

なじで、そのためには親との不和をはじめと

していろいろなことがあつたにせよ「下町の

喜イちゃん」は「正」の力としてこの詩人を

育てたのだ。そして戦争に関する時期にそれは

「負」となつたのである。

ところで昭和二十二年の春先、喜八の詩二

篇をNHK松本放送局で私が朗読することに

なつた。私の父が構成を依頼されたものか、

そうではなくただ松本の局側で作つたものに

相談を求められたのか……その辺りの事情は

忘れてしまつたがどちらにしても、父が喜八

に橋渡しをしたことだけは確かである。

「御懇ろな御懲憲に甘えて詩二篇御送りい

たします。いづれも旧作ですが此の時分の松

本附近をなつかしむ心は、やはり今後の松本

へもこんな風になれかしといふ望みをかける

のではないかと思ひます。二篇とも私の人文

地理学的或は交通地理学的詩に属するもので

あります。之を海彦君に読んでもらふのは望

外の仕合せでした……」

という父宛の喜八の手紙がある。この短い手紙にはこのあと恐らく実夫夫人の父親である水野葉舟氏のことだらうと思われるが、亡くなつたあとのごたごたに悩まされたことなどが記されている。日付は三月十二日とある。

その二篇の詩というのは、一篇は「旅と滞在」所収の「和田峠東餅屋風景」もう一篇は「高原詩抄」所収の「松本の春の朝」である。

喜八が自ら人文地理学的、或は交通地理学的といつてゐるこゝいう詩は他にも多く、山への旅の折りに生まれたものだが、こうした作品はみな喜八独特の技術で仕上げられていく。ともすれば説明的叙述で文章になつてしまふ危うさからわざかに身をかわし、平明な描写で旅人の情感とふんいきをみごとにすべく上げて詩にしてしまう。これは天賦の才ももちろんあるだらうが、伊藤信吉氏が指摘したように口語詩にもつとも安定した形を与えた喜八の、たゆみなく磨きあげてきたわば語り口の巧みさだ。それが努力の結果だということは初期の詩と比べてみるとつきりする。

初期の長い詩には散文的にすぎるものが多く、それを力業でねじふせてゐるような所がある。私は韻律をもたぬ日本の口語詩はどこまで散文に侵されるかといふ微妙さで成立すると思つてゐるが、喜八にあつてもそつとした技術の冴えがみえてくるのはようやくこの詩の收められてゐる「旅と滞在」からなのである。

唐沢、男女倉口、接待と、

さみだれに濡れておもたい新緑の山みちを

論理的に、ぎりぎりに、

ねじ上つて來た大型バスがゆらり停まつた

東餅屋の茶店前、

ふらふらと出てゆく乗合いの客のあとから、

「御苦勞」と撫でてやりたい車を下りれば、あたりは変にかかるく、暖かく、此處は未だ芽立ちのままの樹々の梢に霧の檻襷がからまつてゐる。……(後略)

喜八が自ら人文地理学的、或は交通地理学的といつてゐるこゝいう詩は他にも多く、山への旅の折りに生まれたものだが、こうした

作品はみな喜八独特の技術で仕上げられていく。ともすれば説明的叙述で文章になつてしまふ危うさからわざかに身をかわし、平明な

描寫で旅人の情感とふんいきをみごとにすべく上げて詩にしてしまう。これは天賦の才ももちろんあるだらうが、伊藤信吉氏が指摘したように口語詩にもつとも安定した形を与えた喜八の、たゆみなく磨きあげてきたわば語り口の巧みさだ。それが努力の結果だということは初期の詩と比べてみるとつきりする。

初期の長い詩には散文的にすぎるものが多く、それを力業でねじふせてゐるような所がある。

私は韻律をもたぬ日本の口語詩はどこまで散文に侵されるかといふ微妙さで成立すると思つてゐるが、喜八にあつてもそつとした技術の冴えがみえてくるのはようやくこの詩の收められてゐる「旅と滞在」からなのである。

車庫の前にずらりとならんだ朝のバス、だが入山辺行の一一番はまだ出ない。

若い女車掌が車内を掃いたり、手の平ほどの如露を振つて水を撒いたり、

そうかと思えば運転手が

広場で新聞を読んでいたり、体操のような事をやっていたり。

夜明けに一雨あつたらしく、空気は氣持よく湿っている。

山にかこまれた静かな町と清潔な田園、もう岩燕が囀り、れんげそうの咲く朝を、そこらじゅうから春まだ寒い雪の尖峯が顔を出す。

日本のグリンデルヴァルト、信州松本。

凜とした美しい女車掌が運転台の錫の花瓶へ、紫と珊瑚いろ、

今朝きりたてのヒヤシソスを活けて去る。

「松本の春の朝」と題するこの詩も情景だけを切りとつて巧みにその朝のまだ冷たいが清潔でしつとりとした感じを表現している。

「日本のグリンデルヴァルト……」といふ一行がこの詩人のつい洩らした愛情過多をあらわして微笑ましいが、この部分を除けば終始描写に徹していく、だがそのことでかえってこちら側の「私」のまなざしを想起させるものとなつていて。これも下手に並べていけば文章になつてしまふ所で、いかにも喜八らしい語り口、芸というほかない。

私はこの二篇を朗読したのだが午前中か午後あたりの番組だったせいか前日に松本に行つて浅間温泉に泊った記憶がある。今では塩嶺トンネルをぬけて諏訪からはあつといふまの松本だが当時は一時間半以上かかったので

はなかつただろうか。松本の放送局も古い建物の頃で、せまいスタジオ内で芸者風の人達が民謡などをすませたあと入れかわつて読んだ（その頃は生の放送だからやり直しのきかない一発勝負である）。私の朗誦が終るとまた民謡かなにかに移るらしく、ガラスの向うに一時席をゆずつた芸者風の人たちがまだひしめいてみえていた。いま思うとまことにおかしな風景だった。……所が、この朗誦の

つた電波はフェーディングして諏訪でも富士見でも実にききとりにくかつたらしい。やはりまだ敗戦直後のせいか、これも今考えると嘘のような話である（寒子夫人は耳をつけて聴きましたよと後でなぐさめては下さつたが……）。

明るい夏は昼も夜も

この高原をきらびやかに流れて行つた。

しかし心はひとつの重い仕事の

甘美と熱との密室に深く埋もれて、

いくたの爛熟した大きな果実やさわやかな硬い結晶を産みつけた。

今ことごとく産みおわつて

深い疲労と和やかな秋とが私にある。

羽毛の抜けた白鳥のように、

積荷をおろして漂い出た小舟のように、或る誇らしさと自由とを感じながら、なお残るふしぎな不安に揺れている。

つねにあまり高価に見つまるな。
絢爛をつくしながら一朝を散る木々のよう

に、

努力の思い出を凌駕せよ。

傑出して軽くなれ。

その時お前にすべての仕事が歌になる。
その時お前の秋の前方に、

又新らしい 意味ふかい冬が遠くひらける。
(「或る訳業を終えて」)

この詩は七年間の富士見生活のあと、東京玉川の新居に移つてからのものだが、書かれたのは富士見である。後年の自註をよめば判るが喜八は東京に戻つてからも夏になるとなつかしい富士見の山荘にいつてはまとまつた仕事をしていた。この訳業はリルケの「時禱詩集」と自註に記されている。そして約二ヶ月の間リルケの世界と丁々発止とやりあつたあと、解き放たれたごとく晴れやかな気分の中ですらすらと書けたといつてある。

おそらくそのすらすらが読む側にもつたわつてくるせいか、終聯のともすれば理におちかねない言葉が、魅力的なひびきで、まるで自分が今、秋を目のあたりにして感じている言葉のように素直に入つてくる。こうしたうつかりすると理屈になつてしまふようなことも喜八は実にうまく詩に仕立てあげる。さき

にのべた風景の平明な描写の重なりで詩人の側の情感に読む者をして巧みにひきいれてしまう術と通じてゐる所がある。

しかし思うに、お前自身の仕事の成果を

私は言葉を「物」として選ばなくてはならない。

それは最もすくなく語られて、深く天然のように含蓄を持ち、それ自身の内から花と咲いて、私をめぐる運命のへりで

暗く甘く熟すようではなくてはならない。

それがいつでも百の経験の

ただひとつの一要約でなくては——

一滴の水の零が

あらゆる露点の実りであり、

夕暮の一点の赤い火が

世界の夜であるように。

そうしたら私の詩は、

まったく新鮮な事物のよう、私の思い出から遠く放たれて、

朝の野の鎌として、

春のみずうみの氷として、

それ自身の記憶からとつぜん歌を始めるだ

喜八はその隨想や序文その他の文章で、自分の詩への姿勢や願いにふれていくらか書いてはいるが改まつて「いかに詩を書くべきか」などという評論めいた文章は書いていない。

それだけはこの「言葉」と題した詩は作品としてもすぐれているが、詩人喜八の言葉に対する考え方——少々大げさにいうならその詩法の秘密まで感じさせる貴重なものだと私は

思う。

冒頭でまず「私は言葉を『物』として選ばなくてはならない」といつている。そしてそれは「百の経験の、ただひとつの一要約でなくては——」という。こういうふうな言葉をまず物としてつかみとらねば……という意識は喜八以前の詩人たちにはなかつたことで、喜八と同時代の詩人たちにしても果してどれだけの人がはつきりした自覚で言葉にむかっていただろうか。日常生活の中で平明に情感を歌おうとするこの詩人にもときとして、感傷があふれ冗まりすぎることがなかつたわけではない。いや、それどころか小さなものに感動しそぎるきらいが多かつたくらいである（ことに初期の時代に）。だがその生の感傷におぼれずきつかりとした詩型を創り得たのはこの言葉というもののへの近代詩人としては新らしい自覚のせいだったといえるだろう。

喜八自身のそれはたゆまぬ努力によることもろんだが、私はあの彫塑的な、言葉を煉瓦でも扱うようにつみあげた高村光太郎の仕事から受けとつた所もあつたのではないかと推測している。尊敬し兄事していた光太郎から無意識のうちに告げられたものが、喜八の中で喜八なりに実つたような気がする。

ともあれ、この言葉への自覚によつて、富士見時代「花咲ける孤独」の高みへのぱりつめ現代の詩へと見事な橋を架けたことだけはまちがいない。

その「花咲ける孤独」のなかで、喜八はまた言葉についての詩を書いている。これはた

ぶん戦後の急激な抒情否定からいっせいに拡がつた放持な詩作品群への批判だろうが、終聯の最後へかけてのあたりは信州富士見でふたたび新らしく生き始めた自信に裏づけられたゆるぎないこの詩人固有の姿勢があらわれている。

彼らのつかう言葉はおおむね壁だ。

でこばこな ゆがんだ鏡面だ。

概念はただ音として騒がしく跳ねかえり、矯正し得ない乱反射に

どんな映像も正しくは結ばれない。

粗大な意味だけで通用する言葉が

紙幣のように吟味もなしに授受される。

それは忽ち手ずれて、破れて、きたならしく、もう皺くちゃになつてゐる。

だがそれを金に換えようとは誰もしない。

然しほんとうの言葉は生きた象徴だ。それぞれに純粹な質と形象とを具え、固有の色や匂いやしらべを体して、処を得れば陸離として生動すること花や水や星のようだ。

……あれは昭和二十二年のいつ頃だつたか季節が思い出せないが夏前ではなかつたどうか。私は中島邦一さん、三輪誠さんと三人で雑誌を作ろうとしたことがある。中島、三輪の御二人は私よりはるかに年長だが、その前年諏訪文化聯盟という兵役から帰還してき

た諏訪一帯の俊秀たちによつて作られた若い文化運動の末席に加わったことから急速に親しくなつた。もつとも三輪さんはそのときからずっと以前、諏訪湖畔での稚い私と遊んでくれた優しいお兄さん（！）としてのふしぎな縁があつた。たしか文化聯盟への橋渡しもその三輪さんだつたのだろう。中島邦一さんも三輪誠さんも、まるで作風はちがうがすばらしい詩の書き手、その作品は当時やつと文語詩の呪縛から脱けたばかりの私の作などとは比べようもないものだつた。こまかい経緯は忘れたが、中島さんの家で集つてあれこれ相談をした情景は記憶に残つてゐる。いろいろ誌名が候補にあがりなかなか決まらなかつた。（私は「樹想」という名を提案していた）そんな折、雑誌を作る報告をかねて喜八からも誌名のいい案をさしつけてもらおう、と私たちは富士見に出かけた。

……喜八が私たちの作る雑誌についてどんなふうに助言してくれたか情ないことにつつかり忘れてしまつたが、その時、喜八が考えだしてこれはどうかといつてすすめてくれた雑誌名は「水路」であつた。西欧かぶれしている文学少年の私は一瞬とまどつた。三輪、中島にしても同じ思いだつたらしい。辞去したあと「うーん、水路とはねえ」という私に三輪誠さんは「なんだか水道局の雑誌みたいだね」といつた。

企画は細々とやつて夢ばかりふくらませるのは得意だが、実行力の乏しい私のせいで、その雑誌の計画は泡ときえた。（少し弁解す

ればたしかに雑誌などというものを出しにくい時代だつたけれど）……しかし、実行力のある三輪さんのほうは友人のつてをたどつてなんと佐藤敬さんに表紙の絵を描いてもらつてしまつて。実現しなかつた雑誌の表紙を飾るはずだつたその絵はいまも三輪さんのもとにあるはずだ。私はその絵をまだみていらない。

それにしても中島さんはその後実業の道に入り、三輪さんはすっかり化学者としての仕事をうちこみ、二人とも詩を書かなくなつてしまつた。それがいまだに残念でたまらない。

……おかしなもので、「水路」という名はそうわるくはないじやないか……とそれから三十年もたつた五十を過ぎた頃になつて私は思つた。この頃では（わるくはない所ではなく）、仲々いいと思うようになつた。こつちが年をとつたせいかとも思うが、水の路とい

う言葉からくるイメージがあの当時うけた單一の印象ではなく、もつと幅のある意味深いものに見えてきたからである。それというのもあの若い日、高原の一角で喜八という高みからふりそいだものは、私の心の地層でふしげな水路を作り思ひもかけぬときには湧き水として姿をみせたりするからで、これは三輪さんにしても同じ想いではないだらうか。

伊藤海彦氏は平成七年十月二十日逝去された。尾崎の長年の友人であり、折にふれて尾崎について語り、後世への橋渡しをして下さつた大事な方であった。尾崎喜八への旅（五）

の原稿は平成六年十月にいただいてあつた。次の「想い」は亡くなられる直前に江ノ電沿線新聞に書かれた絶筆である。編集部

想　い　— 海と空と —

今　入院している部屋の窓から海が見える。おだやかな空と海を切つて水平線がまつすぐのびている。何年か前　この欄で常世の島について書いた事があるが、それもこの辺りから眺めだ。あれが大島だと知つてしまつた私達と古代の常世の島だと信じられた人達どちらが幸福なのだろうか。錯覚も時によつて美しいこともある。その空を飛ぶ鳥の美しさ、つくづく鳥の飛翔は美しいと思う。海鳥の飛翔を見ていて、ふと思いを遠く信州の空に馳せる。多分　今頃少しづつの群を作つてカケスが小さな渡りをしているだろう。

尾崎喜八に「山国の空のあんな高いところを／二羽三羽　五羽六羽と／かけすの鳥のとんで行くのがじつに秋だ」という初聯で始まるすばらしい詩があるが、そこには飛んでいく鳥と見送つてゐる者との言葉も何もない生のつながりがある。

空の色が少し斜むいてきた。今はあの海鳥に向つてどう呼びかけたものか。

以前書いた時も墓所の死者達と私は眺めていた。今日も又　ほとんどの変わらない位置で眺めている。あの時湧き上つた私の思いと、今の私の心から出る言葉は、はたして同じかどうか　それは判らない。

詩「土地」が定本（尾崎喜八詩文集『花咲ける孤独』） に到るまでの異同及び「富士見に生きて」について

（「富士見に生きて」は2頁参照、傍線部分は推敲箇所）

嘉納忠明

國土（初出）

- 4 時の試練にしつかりと堪えた
 5 静かな大きな書物のように
 6 私の前に大きく傾いてひらいている。

- 1 編まれた網の目のやうな、
 2 人の世の道の偶然が私をこゝへ導いた。
 3 古い岩石の地の起伏と
 4 めぐる晝夜の大きいなる國、
 5 自然がその親しさと厳しさとで
 6 こもごも生活を規正する國、
 7 忍従のうちに形成される
 8 みごとな収穫を見わたす國。
 9 それが今、
 10 四方の空をかぎる山々の頂から、
 11 もみぢの森にかくれた谷川の河原まで、
 12 時の試練にしつかりと堪へた
 13 静かな大きな本のやうに、
 14 私の前に大きく傾いて開いてある。

展望

今私たちは夏のおわり 秋のはじめの
 濃い朝霧と燃える夕日の季節を生きている、
 生きる事が他のもつと恵まれた土地よりも
 はるかに厳しい労働をもとめる土地、
 この山坂多い 冬の長い国の中畠で
 忍苦と過労とに面やつれした人々と一緒に。

土地（定本）

- 1 人の世の転変が私をここへ導いた。
 2 古い岩石の地の起伏と
 3 めぐる昼夜の大きいなる國、
 4 自然がその親しさときびしさとで
 5 こもごも生活を規正する國、
 6 忍従のうちに形成される
 7 みごとな収穫を見わたす國。

都会からの身が習慣を変え、
 いくらかは精神の風土にさえ
 この国の雨や日光を反映させて、
 すでに早くも幾年がすぎた、
 永遠をかいま見させる美にやしなわれ、
 喜びの一層痛切なものを味わいながら。

人や土地への敬虔なこまかい接触が
 ついに此処をふるさとのようとした。
 冬のきびしい凍結にも馴れ、
 石多い山坂の道にも馴れながら
 それぞれの季節の意味を汲み上げて来た私
 たちに、

今この国の夏のおわり 秋のはじめの天地
 がある。

- 1 その暮わしい土地の眺めが 今
 2 四方の空をかぎる山々の頂きから
 3 もみぢの森にかくれた谷川の河原まで、

国土（初出）「蠟人形」昭和二十二年一月
 土地（定本）『尾崎喜八詩文集第三卷』

長野県富士見町に、尾崎喜八の詩碑

「富士見に生きて」が建ったのは昭和

五十五年八月末日で、尾崎の遺徳を偲

ぶ地元の人々の熱意の結果であった。

その回想と努力の跡は『尾崎喜八先生詩碑建立記念誌』に詳しい。

今秋、富士見町では念願の図書館、

文学博物館を含んだコミニティ・ブ

ラザが完成し、長らく高原中学校の丘

の森にあって親しまれてきた詩碑も施

設の一郭を担い、前庭に移ることにな

った。

コミニティ・プラザの一階に、富

士見高原ゆかりの文学を紹介する「高

原のミュージアム」があり、中でも尾

崎のコーナーは主要な展示になつてい

る。かつて八ヶ岳を仰いだ詩碑は、尾

崎が、七年間住んだ分水荘の森へと向

きを変え、館内の詩人の世界を象徴す

るかのように建っている。

詩碑に刻まれた「富士見に生きて」

は、『尾崎喜八詩文集第三卷 花咲け

る孤独』に収録されている「土地」の

改題で、独自の作品ではない。

この小文では、初出「国土」から

「土地」「富士見に生きて」と変わる一

連の校異を元に、尾崎と富士見との交

流を考えてみたい。

(+) 校異資料

(1) 表題と収録書（刊行順）

①「国土」詩誌「蠟人形」S 22・1

②「国土」『高原曆日』S・23・3

③「国土」「日本山岳会信濃支部報」

- ④「土地」『尾崎喜八詩集』創元文庫 S 27・6
- ⑤「土地」『詩集 花咲ける孤独』S 30・2
- ⑥「土地」『尾崎喜八詩文集 第3卷』S 34・10
- ⑦「富士見に生きて」尾崎喜八揮毫 昭和四十四年、富士見町に寄贈（巻頭詩）

(+) 主な推敲と個所

①『高原曆日』に於て、初出の長一連十四行の形を第九行で分けるとともに第一行を削除し、第一連七行、第二連六行の二連構成になる。

②その分離の際、長一連第九行で前段を受ける「それが今」は、新たな第二連第一行で「その暮はし」の「国土の眺めが 今」になる。

③『高原曆日』に於て、初出第二行の「人の世の道の偶然」が、第一行の「人の世の転変」となる。

④『信濃支部報』に於て、第一連第六行が欠落しているのはミス？

⑤『尾崎喜八詩集』に於て、表題がそれまでの「国土」から「土地」になる。それとともに第二連第一行の字句、国土が土地になる。

⑥『尾崎喜八詩集』に於て、第二連第五行で、これまでの大きな「本」が「大きな書物」になる。

卷』の異同は、新旧仮名づかいである。

待を持ち前の求学の心にこめて信州の風土に眼を向けている。

⑨以上をまとめるに、「土地」は『高原曆日』の「国土」で基本形

ができ、『尾崎喜八詩集』で、国

土—土地、本—書物の字句を改め

て定本『尾崎喜八詩文集第三巻』

の形に整つたといえる。

しかし、一年後の『高原曆日』を編

異同は、第一連第四行の「きびしさ」が「厳しさ」に、第二連第三行の「もみじの森」が「緑の森」になつたところである。

⑩「土地」の原形「国土」が、「科野

歌二篇」の一つとして詩誌「蠟人形」

に掲載されたのは昭和二十二年一月号

である。詩中の「みごとな収穫」「も

みじの森」等の語句によって、前年の

昭和二十一年秋の作と分る。このこと

は尾崎が富士見に移つて未だ月日の浅

い頃の詩境であることを示している。

戦火で家を失い、戦後は戦争協力者

の名の下で、「恥を忍び、おもてを伏

せて一年」（到着）転々と居を替え

た尾崎は、昭和二十一年の夏、人の縁

の偶然つながりから東京を去つて分

水荘に落ち着くのである。

尾崎は夫人とともに一無名者として

永年の念願どおり、山野の自然に没

入して万象との敬虔な融和のなかに魂

の和平をつむぎ、新生の美しい視野を

得なければならないと決心（詩文集

第三巻「後記」）し、新たな生活につ

るが、「それぞの存在に固有の意味を認め

ながら、一層深い信赖と一層篤い感謝

の念とをもつて生きる」（春の雲）

ようになる。名作「或る晴れた秋の朝

の歌」を始め、「足あと」「雪の夕暮」が、そこから生まれる。一方、「夏野の花」「復活祭」「冬のこころ」と自然と人生が清澄に響きあう新たな詩境の展開がある。

昭和二十六年十二月に編まれた『尾崎喜八詩集』で、「国土」は「土地」と改題され、詩句の語も同様に改められた。土地には国土より身近な領域で生活に密着し、より具体性をもち、親しみがある。前述してきましたように、尾崎の富士見に寄せる愛着は、『高原曆日』を編んだ頃より濃やかに厚くなっている。その投影が「土地」に変えさせた、と考えられる。

これにつれて参考になるのは、「展望」である。ここには何年間かを富士見の、土地に生きて初めて得ることでのきる歌がある。筆者は、尾崎の富士見の愛の詩として、「土地」のよき姉妹篇に見立てている。

「富士見に生きて」は、先述したよう

に「土地」の改題で、目立った推敲は第二連第三行のもみじの森が緑の森になつた点である。緑の方が四季を通して力強い、とみられたのだろうか。

富士見町から請われて、この「土地」＝「富士見に生きて」を贈った尾崎の心のうちに、この詩が尾崎一人の富士見への賛歌ではなく、富士見に生きる人達が己れの土地に誇りをもち、眼前の大いなる知恵を汲んで欲しい、という願いがあつたことは明らかであらう。



『田舎のモーツァルト』出版記念会（昭和41年於新橋・王府） 前列左から富士川英郎、安川加壽子、尾崎実子、尾崎喜八、手塚富雄、久保井理津男、中列左から東洋恵、吉村博次、山崎栄治、鳥見迅彦、串田孫一、後列左から伊藤海彦、辻一、山口耀久、朝比奈菊雄、川嶋利哉、安川定男、野本元、三宅修の諸氏。

尾崎さんと西欧

故伊藤海彦に

三輪 誠

今はもう遠くへ逝ってしまった海彦君と最後に長く会話をしたのは一九九四年一月の富士見であった。この日は富士見コミュニティ・プラザのなかの尾崎記念室開室の日で、私は町の教育委員会の若い人たちによつてまとめられた、その記念室の予期以上に見事な、そして尾崎さんに対する敬愛の心づかいの伝わつて来る出来栄えに、心から喜んだ。セレモニーや展示物の閲覧も終つてひと段落したとき、私たちは会場の一隅で彼の近作である「午後の牧歌」について話をしていた。いつしか話は尾崎さんの事に移つてゆき、彼は更また口調で「貴方は科学者だから、尾崎さんの事をしっかりと分析してもらいたい。義務ですよ」と言つた。これが彼との最後の面談の機会となるうとは。

これより先、敗戦直後に諏訪に居て、尾崎さんと交流のあつた人たちの一人としての追憶を「尾崎喜八資料」に書いて欲しい、といふお話が栄子さんからあつた。しかし、私は当時の日記を京都で盗難に会つて失つていたので、具体性を持つた記述が出来ない、とお断りをし、しかし、もしある許しがあれば「尾崎さんと西欧」というようなテーマで書いてみたい、とお返事した。栄子さんからのお返事は、お待ちします、というものだった。その様な気持の下地があつたので、海彦君の言葉を素直に受け止めた。

その様なわけで、私はずっと尾崎さんと同世代の人たちの考え方や、その背景となる日本の人一般的な考え方などについて考えていました。それに明確なきっかけを与えてくれたのは清沢列の「暗黒日記」だった。彼ほど戦前戦中の日本の政治の中枢の近くにいて、しかも彼ほど戦争について適確な見通しを持つてゐた者でさえ、こと皇室に関しては全く論理的でなく「宗教的」なのである。この不連続性については、解説者もわざわざ後記で取りあげている位である。ちなみに清沢列は一八九〇年生れ、尾崎さんは一八九二年生れの、共に明治の人である。尾崎さんの戦中の行動を推測する一つの手がかりにはなるであろう。

その明治とはどんな時代であったのだろう。日本人の思想特性に關しては多くの著作が刊行されている。外国人による著作も少なからずある。それらの中で、私は丸山真男氏の著作が、批判はあるにも拘らず、本質を衝いて秀れていると思う。また、科学論をふまえたものとしては(西歐文化文明を論ずるに当つては、此の視点を欠く事は絶対に許されない)村上陽一郎氏の所論が論点明確で秀れている。丸山氏によれば、日本の社会は部落共同体であり、決断主体の明確化や利害の露わな対決を回避する情緒的直接的な結合態であり、一切の抽象的理論の呪縛から解放されて「如」の世界に抱かれる場所と定義される(丸山・日本の思想)。そして、思想的対決のない「精神的離居」こそが日本が西歐文化文明をとり入れた明治時代の姿勢であった。つまり、「異質的な思想が本質的には交わらずに、ただ空間的に同時存在している(丸山)」のである。日本のその後の歪みの原因は、後で

述べる様にこの異質の文化文明を異質のまま取り入れた、所謂明治近代化に始まると私は考えるが、しかしこの新しい侵入者は、異質であるだけに新鮮な魅力があつた。明治の人である尾崎さんも、その魅力から逃れる事は出来なかつたであろう。

多くの論者が素通りしているが、私は短い期間とはいえ朝鮮滞在の体験は尾崎さんを考える上で大事ではないかと考えている。重本恵津子さんの著書の中には、『この京城で得たものといえば、数人の朝鮮人の友達と、日本の統治に対する彼等の内密な不平や憤懣へ』の認識と、この半島の古都やその周辺の田園美を、愛と同情の眼で見たことだつた』と喜八は言つてゐる（重本・花咲ける孤独）とあるように、尾崎さんは権力の行つてゐる醜さをはつきりと眼に、耳にしている筈なのだ。それは正にヒューマニズムと直結する問題であり、帰国後の尾崎さんの生活を溢れ漫してゆく西欧ヒューマニズムと繋がつて、詩人の心の深い所に、それこそ空間的同時存在ではなく、本質的な葛藤を経た定着があつた筈だ、と思うのだが。そしてもしもそうであつたら、情報を知る、知らない、という知識の問題ではなく、詩人としての直観で戦争に対する対応も変つていかなければ、と思うのだが。

しかし、尾崎さんは自らの過ちを恥ぢ、それを明確に認め、自らを罰した。尾崎さんは恥を知る明治の人だった。戦中協力した多くの知識人のうち、何人がこの様な明確な謝罪の行動をとつただろう。それはいさぎよい事

ではないか。そして、その苦しみからの出发があつたからこそ、富士見での七年間があれだけ稔り深いものになつたのだと思う。しかし、次で述べる様に、西欧の文化文明が異質であるという、精神的雜居の認識はなかつた様である。

これはアルプの尾崎喜八追悼号（一九七四）にも書いた事だが、尾崎さんの作品には西欧が分かち難く入り組んでいて、それが尾崎さんの作品の或る面での魅力になつてゐるが、その分かち難い西欧に対して、ふと不安になる事はないか、という私の質問に対し「そんな事考えた事もありませんよ」と質問そのものに驚かれた様子であつた。かつて文系の女子大に講義を頼まれ、『どの様にして人間は眼に見えない空気の中に、酸素と窒素という元素を見出したか』という題で、半年間の講義をした事があつたが、その講義をしながら、西欧人の自然現象に対する執ような、そして論理的な実証的合理追求の姿勢に感服すると共に、これは全く東洋にはない姿勢だ、と思った。東洋にあつたのはテクノロジーでサイエンスはなかつた。あの富んだ中国ですら——富んだという意味は、富の蓄積がなければサイエンスは育たないと私は考えるからだ——その技術的蓄積を集約して近代物理学につながり得るようなサイエンスへと系統づけることは出来なかつた。そして、西欧の、その飽くなき合理追求の姿勢が生み出したサイエンスが、彼等の文明のみならず、全ての文化的骨格を形成している事も分つた。つま

り、サイエンスを生み出した歴史を持った事に、その文化文明の特性が集約される。私にとって不可解な事は、西欧を論ずる日本の多くの論者が、その生れて来た土壤であり骨格であるサイエンスに考慮を払わないという事だ。サイエンスは物質に関する知見で高度な精神文化とは関係ない、と思っているのかもしない。しかし、現在のサイエンスは、宗教も含め、精神分野へのアプローチは鋭く本質的である事を知るべきだ。

私は文化文明のなかで有用性（ユーティティ）の機能を持つものを文明と定義したいと思う。そして、彼等の文明は、その実証性、合理性、論理性の故に、その源である『Why』にまで遡らなくても、結論の『How』を、有用性を使うことが出来る。かくして彼等の合理的な文化文明は、村上陽一郎氏の言われる様に、他の文化文明を攻撃、侵略するのである（村上・文明のなかの科学他）。例えば音楽を考えてみればこの事は明白であろう。＊ その攻撃、侵略への対応が明治近代化であった。一見、賢明に対処したかに見えるその近代化も、西欧の本質理解ではなく、精神的雜居であったため、その有用性にのみ眼を向けて、『合理』を『功利』、『効率』とすり替えてしまい、西欧近代の本質を、実は何も学んでいなかつたのではなかろうか。今度の敗戦で明治偽近代化の誤りを痛切に思い知られたにも拘らず、我々はまた、同じみちを歩き始めようとしている。そして、この合理→功利・効率の見掛けの成功を、アジアの後発国

は見習おうとしている。それに対し、我々はどの様な助言が出来るだろうか。

尾崎さんについて考る事は、尾崎さんの個人の生き方、属した時代の問題から拡がって、近代化、西欧と東洋、と日本が直面している本質的な問題へと繋がり、それらの問題からの逆投影する事により、より明確になってゆくよう思う。

外国人による日本に関する著書の多くは、例外なく彼等の文化文明を絶対的尺度として日本の評価を行っている。確かに民主主義は人類のもつ最高の思想の一つだと思う。これも彼等の合理的結論である。非合理は、迂余曲折はあるにしても必ずや合理的の前に敗れるであろう。それは歴史的必然と言えるかもしれない。しかも、文明における優劣は既に明白である。しかし、私には、ギリシャ以来の長い年月をかけて執のようにあのサイエンスの体系を創った西欧人と、私たち東洋人などが、基本的な発想において同一になり得るとはどうしても考えられない。だから、海彦君の遺言に対し、本質的な意味で明確な答を得るに到っていない。

* 現在、我々のまわりは西洋音楽が圧倒的に支配している。「音」という物理現象を、東と西がどの様に文化として定着させていったか、その差の本質は何によるのか。この問題は本小論のテーマとも関連すると思われるが、いささか個別的な論議に入る様にも思われるので別の機会に譲りたい。

(一九九六年八月)

尾崎喜八記念施設の開館と、北鎌倉の旧居の焼失

両者とも、すでに旧聞に属するものとなるが、一九九四年の秋から冬にかけて、喜八をめぐる大きな事件が相次いだ。一つは、同年秋に、懸案だった長野県諏訪郡富士見町のコミュニティ・プラザの「高原のミュージアム」が開館し、その大きな部分として、喜八の生涯、詩業、富士見での生活が常設展示されたこと。もう一つは、それと踵を接するかのように起きた、喜八の北鎌倉の旧居の全焼という事件である。とくに後者は、この二年間、「尾崎喜八資料」の刊行が休止された第一の原因となつた。

この二つについての、当時の新聞報道を採録し、それを以て、この二年間の変化のご報告したい。

(石黒敦彦)

七年間暮らした 尾崎喜八を軸に

長野・富士見町に文学館

八ヶ岳を間近に望む長野県富士見町のコミュニティ・プラザ内に、文学博物館「高原のミュージアム」がこのほど開館した。展示の

尾崎喜八（一八九二—一九七四）は厳しい戦後期の七年間をこの地で暮らし、後に「自註 富士見高原詩集」にまとめられる多くの詩や美しい文章を残した。

尾崎コーナーは遺族からの寄贈資料を主体に約二百点で構成。

「詩と理想主義の時代」「山と文学の出会い」「音楽への愛と感謝」などの表題のもとに、高村光太郎らとの交友の中で詩作を始めた初期から多くの著作に恵まれた晩年までをたどつていて。

著作、自筆原稿、色紙などのほか、自然と音楽への親しみが創作の源泉となつた詩人らしく、愛用のカメラ、登山靴、双眼鏡、ブローチフレーテなども並ぶ。富士見高原時代の丹念な野鳥観察目録などに、「よく見る事によつて理解し、理解する事によつて愛し、その愛から芸術を生ん」できたこの詩人の面目がうかがえるようだ。

他にも、この地の美しい自然に触発されて文学活動を行つたアララギ派の歌人や作家の資料も展示している。入館料三百円。月曜日・祝日の翌日・年末年始休館。

(朝日新聞 平成六年十一月十一日夕刊)

書は焼け失せ、それで
もなお詩の言葉は残る

石 黒 敦 彦

詩人・尾崎喜八(明治二十五年—昭和四十

九年)がその生涯を終えた鎌倉市山ノ内の旧居が、去る十一月二十三日に全焼した。喜八の遺品のほとんどが灰燼に帰した。

旅先でその報せを聞き現場に駆けつけた私は、喜八の書斎があつた二階がすっかり焼け落ちて書棚も机も見る影もなく、ただ炭化した梁だけ針金細工のように頼りなげにむきだされた光景を無言で眺めるしかなかつた。

そこは祖父・喜八のついの棲み家であると同時に、私にとっても二十八年を過ごした場所だつた。焼け跡に立つた私は、こうした受難に遭つた幾多の人々と同様に「多くの努力と多くの歳月が」とつぶやかずにはいられなかつた。

遺族の一人である私が言うべき言葉かどうかわからないが、喜八の遺した資料、書簡、遺品類は、没後二十年間まったく散逸せずに、よく保存され、新資料の発掘も積極的に進んでいた。そして普通ならば文学館の職員がするような仕事までが、研究者や愛読者と遺族との協力によって進められ、その成果は年刊の研究誌「尾崎喜八資料」をにぎわしていた。尾崎の処女出版から絶筆までの全單行本(アンソロジーを含む)百二十二冊を収集して写真を添えた「著作目録」を刊行し、主要な業績を長野県諏訪郡富士見町の「高原のミュージアム」に展示したのも、こうした活動のたまものであつた。尾崎家に集められた資料類の整理は理想的に行われていたが、この度の火災はそれらをすべて呑み込み、「白樺派」をはじめとして喜八の関わった大正、昭和の

詩史、山岳文学を巡る貴重な一次資料の多くが失われた。喜八の詩・文学の研究が、生誕百年(平成四年)を機によく新しい段階に入りつつあり、そのためこれらは資料がいよいよ真価を發揮しようとする矢先の出来事であった。

しかしこのような困難の中につつて、明るい話題として、十一月一日に富士見町に開館した「高原のミュージアム」の展示の約半分が喜八の生涯、文学、富士見での生活の紹介に充てられていることがある。八ヶ岳山麓のこの高原は、戦前からララギ派をはじめ多くの歌人、文人、知識人が逗留したことでも知られている。また富士見高原療養所の存在に象徴されるサントリウム文学も発展した。喜八は敗戦からの七年間をこの地で過ごす中で、それまで自然な平明な生活風景への賛美が中心であった自分の詩を、宇宙的な存在のドラマにまで昇華することに成功し、珠玉の詩文を次々に創造した。

また、地元の人々とも積極的に交わり、得意の博物学の知識を生かして高原の自然の見方について教えもした。こうした交流を思い出深く覚えている多くの人々の尽力によって、詩人の全貌を紹介する展示が可能になつた。詩の他に、登山、自然観察、音楽鑑賞などにも業績を遺した喜八らしく、展示は多彩ではなやかであり、高原文学の香気が漂つてくるようなミュージアムになっている。

喜八の旧居は土にかかり、彼が深く愛した信濃の自然もまた冬季オリンピックの開催に

向けた開発で大きく変わりつづある。しかし、信州の山や高原の自然美に学んでそこに「自然のネットワーク」の存在を感じた詩人の作品は今なお輝きを失っていない。それらを案内役として近隣の森や野を歩けば、詩人の住んだ昭和二十年代のような高原の雰囲気をまだ味わうことができる。

(東京新聞 平成六年十一月二十六日夕刊)

尾崎喜八旧居の罹炎と 研究会・遺族からの報告

11・12号合併について

平成六年、11号の編集企画にとりかかつた時には、十一月にオープン予定の尾崎の記念施設に歩調を合わせて、4号に統いて再び富士見特集をする予定であった。その為に富士見で喜八にめぐり会つた青年達に原稿を依頼したり、かつて富士見で刊行した雑誌「高原の自然と文化」や「アルプ」に掲載された文章の転載をお願いしたりして準備をすすめていた。その最中に尾崎家の火災・全焼が起り、印刷所に入っていた原稿以外は無の状態になってしまった。研究会の事務関係の種々も灰となり、残念ながら「尾崎喜八資料」刊行に二年近くの空白をつくつてしまい今回合併号を発刊して年度別の帳尻を合わせていただく事にした。事情をご賢察いただきお許しを乞う次第である。

遺族からのお礼

尾崎栄子

沢山の方々からお見舞や激励の手紙をいただき、当時茫然自失状態であった遺族一同どれ

ほど力づけられたか計り知れません。先ず第一に喜八の遺した数々の品々を一挙に失くしてしまった無念と、箸一膳、歯ブラシ一本もない夫々の身の廻り、途方にくれた我々にその後の日から寝る所、続いて住居を提供して下さったのも会員のお一人であつたし、焼失直後の一両日には現場に駆けつけて下さり、我々に手を貸して焼跡から、焦げ、水浸しなかつた原稿や写真やブローナなどを掘り出し、その後原稿一枚々々を植物の腊葉標本を作る時のように乾燥させたり、わずかに助かった写真を急ぎ水洗いをして見られる状態に救済して下さつたのも研究会十数名の方々と石黒敦彦の友人達でありました。

堀隆雄、石田二三夫両氏は古書店を丹念に廻り、また蠟梅忌に参加の会員方に呼びかけて尾崎の自著・訳本を集めに取りかかつて下さいました。その結果ご寄贈も含めて九割近くを集める事が出来ました。愛蔵の本や尾崎の署名献辞のある貴重な本をご寄贈下さつた方々にも厚くお礼申し上げます。

新しく建て直した家に尾崎喜八文庫の部屋遺族は皆さんのご厚意とご協力によつて集められたもの、復元されたもの、寄贈されたものを小さいながらも一部屋に集め、開放展示して研究会の根拠の場所としたいと考え、建築するに当つてゆつくり資料を閲覧出来る場、遺族と懇談する場として一階の大部屋を供する事にした。尾崎文庫は一般公開をするつもりはないが、研究会の各位に限つては気軽に訪れて利用していただきたいというのが我々

の願いである。季節によつて留守をする事があるのと、実子未亡人が高齢である為、事前に電話でご来駕を一報願いたい。

尾崎喜八文庫に収納の資料の紹介は次号でさせていただく。

平成六年のできことは資料焼失の為省略し、七年のできごとを報告する。

蠟梅忌

平成七年二月四日、東京青山の青山荘で行われた。幹事役は川嶋利哉氏・伊藤和明氏。

重本恵津子さんの受賞・出版・研究会への「寄付」

重本恵津子さんの力作「評伝—尾崎喜八—花咲ける孤独」が第十四回潮賞ノンフィクション部門で受賞された。十月には潮出版社から出版。重本さんは受賞賞金から五十万円を尾崎喜八研究会へご寄付下さつたので、有難くお受けした。「尾崎喜八資料」のバックナンバー内の内、焼失した号の復刻、小型コピー機の購入等有効に使わせていただく。

詩碑「田舎のモーツアルト」碑前の集い

七月二十九日、信州安曇野穂高中学校の庭前で同校同窓会主催で行われた。式後、穂高町長を始め学校関係者、研究会からの参加者相い交じえて会食懇談会。

詩碑「富士見に生きて」碑前の集い

八月二十七日、富士見尾崎会主催で富士見町コミュニティ・プラザ会議室で行われた。詩碑は平成六年秋、町の都合で高原の森からコミュニティ・プラザ前の広場に移された。

九月二十二～二十四日、鉢伏山・入笠山・釜無渓谷。西村豊氏のヤマネ、本土キツネの生態、重本恵津子さんの尾崎喜八の評伝、杉浦勝彦氏のフルート演奏、伊藤和明氏の釜無側と八ヶ岳側の地質の相違についてのお話。

十月一日、神奈川県立近代文学館催しの「鎌倉の作家展」に先立ち、文学館ホールで伊藤信吉氏の思い出を交えた講演が催された。

伊藤信吉氏、詩人尾崎について講演

十月一日、神奈川県立近代文学館催しの「鎌倉の作家展」に先立ち、文学館ホールで伊藤信吉氏の思い出を交えた講演が催された。

NHKE-TV特集 八ヶ岳山麓 詩人・尾崎喜八 悔悟と自覚め（十月十八日放送）

重本恵津子さんの受賞・出版・研究会への「寄付」

重本恵津子さんの力作「評伝—尾崎喜八—花咲ける孤独」が第十四回潮賞ノンフィクション部門で受賞された。十月には潮出版社から出版。重本さんは受賞賞金から五十万円を尾崎喜八研究会へご寄付下さつたので、有難くお受けした。「尾崎喜八資料」のバックナンバー内の内、焼失した号の復刻、小型コピー機の購入等有効に使わせていただく。

詩碑「田舎のモーツアルト」碑前の集い

七月二十九日、信州安曇野穂高中学校の庭前で同校同窓会主催で行われた。式後、穂高町長を始め学校関係者、研究会からの参加者相い交じえて会食懇談会。

伊藤海彦氏ともども冥福を祈る。

尾崎喜八資料・第十一・十二合併号
一九九六年十二月一日発行・非売品
ISSN 0911-3339

発行 尾崎喜八研究会
鎌倉市山ノ内一九七一五一(平24)
電話 ○四六七一二三一一七六一

振替 00270-2-33012 尾崎喜八研究会
住友出版印刷株式会社